

平成二十五年にお迎えする「門祖日隆聖人の五五〇回御遠諱」に向けた報恩ご奉公がスタートしました。そこでこの教材も、今年は門祖日隆聖人のご奉公に焦点を当てて学習を進めます。門祖のイメージを膨らませ、報恩の思いを高めてご奉公に臨みましょう。

さて、私たちは普段、門祖日隆聖人のことを「蓮師後身」と尊称して御宝前に言上させていただきます。意味は「お祖師さまの御生まれ変わり」というものです。なぜそのような呼ばれるのかを、門祖日隆聖人のご生誕の様子を交えて見ていきます。

○ 門祖日隆聖人は至徳二年（一三八五）の十月十四日、越中射水郡浅井嶋村（現在の富山県射水市）で桃井右馬頭尚儀公と足利幕府の管領職も務めた斯波義将の息女・益子夫人の長男として、ご出生。父方の桃井家と母方の斯波家は、もと源義兼を祖とする親戚筋で、門祖ご生誕はちょうど南北朝時代と呼ばれた政情不安な渦中での慶事となりました。

○ 門祖のご生誕には、いくつかの奇瑞が伝わります。まず、至徳二年の正月十五日の夜、熱心な御題目の信者であった益子夫人は夢に老僧を見て「如意宝珠を与える」と輝く玉を授かります。同夜尚儀公もまた、錦の袋に包まれた宝剣を授かる夢を見、翌朝、二人は夢の不思議を話し合ったと言いますが、これはご懐妊の日に当たります。

○ 月の満ちた十月十四日の朝、益子夫人は出産されます。門祖のご生誕で、それはまさしく夢の老僧が授けた如意宝珠と同じ、玉のような男児でした。

○ ご誕生まもない桃井家に、小箱を手にした妙と名乗る若い女性が「若君のお守りに来ました」と訪ねます。尚儀公は喜び、妙女を門祖の乳母にしますが、この女性が持参した小箱には法華経の経巻が収められていました。のちに武家の嫡男だった門祖が得度の決意をされた時、尚儀公を説得されたのが妙女でしたので、妙女はまさに法華経の行者守護を誓う諸天善神の化身であったと考えられます。

○ 妙女に続いて白髪の老人がお祝いに訪れ、錦の袋に包んだ刀を献上します。それは尚儀公が、益子夫人の懐妊の日に夢で見たのと同じもので、門祖はこの刀にちなんで長一丸と命名されます。この刀は、門祖の御守刀として今日に伝わります。

○ このように、数々の奇瑞が伝わる門祖ですが、高祖ご入滅の十月十三日から百四年を経た十月十四日のご生誕であることや、高祖と同じく政情不安の世相を背景に世に出現されたこと、誕生の湧き水の奇瑞の一致など、古来高祖のご再来の証とされています。ただし、最大の共通点は高祖の教えをそのまま継承され、日蓮門下で唯一上行所伝の御題目をご弘通された点にあります。門祖を蓮師後身と尊称する所以です。

〔開導聖人御指南〕

吾八品門流、日像門流の再興正導・門祖日隆大聖人は、蓮師後身にましまして、本門八品上行所伝の題目宗、再興の御尊形なること、疑いあることなし。（扇全九卷三四八頁）

〔開導聖人御教歌〕

門流の開基は祖師の御さいらい もとの宗旨にかへし給へり

File.2 再興正導

高祖ご入滅から百四年後にご生誕され、八十歳でご入滅された門祖日隆聖人。人生五十年と言われた時代、その百余年の時間が与える印象は、今の感覚より遙か遠くに高祖を感じさせたことでしょう。情報伝達の手段も現代とはまったく事情が違います。そしてこれらの条件は、高祖の御教えを埋没させるには充分のものであったのです。

私たちが門祖日隆聖人のことを「再興正導」と尊称させていただくのは、そんな歴史の渦に埋もれかけた高祖の御教えを復興し、再び後世の人々が見失うことのないよう正しく導かれたご奉公に対し、報恩感謝の心を表しているのです。

○ 応永三年四月八日、満十一歳の門祖日隆聖人は霊夢を感得し、ご出家を決意されます。

武門の嗣子の出家の願いに両親は大反対をしますが、ご幼少より学才非凡な門祖を、地元遠成寺の慶寿院が見込んで父の尚儀公に得度を勧め、また熱心な法華信徒であった乳母・妙女も尚儀公を説得し、門祖の得度は果たされたと伝えまます。

○ 間もなく門祖は、法華信仰の真髓を極めるため俗縁の叔父を頼って上洛し、京都の法華信仰の中核だった妙本寺の門をくぐります。十三歳のときのことでした。

○ 当時の京都朝廷と幕府が置かれ、政治や経済、文化の中心でした。日像菩薩の帝都開教からも百年が経過し、門下も続々と上京して有力な外護者を得、市中には「法華衆」「日蓮党」と呼ばれる信徒が勢力を増して、寺院も建立されていきました。

○ ただ、法華経の信仰は天台宗のものというイメージがまだ強く、高祖のご門下も天台宗の一派と見られる向きがあったようです。しかも独自の寺院やテキストが不十分で、天台宗の寺院に寄宿し、天台宗のテキストで法華経を学ぶ学僧も多く、必然それは天台の宗義を昇華した高祖の教えが、もとの天台流の法華理解へと退行する因になりました。

○ 加えて高祖のご流儀の折伏弘通は怨嫉を生みますので、教学基盤の脆弱な門下の中には既成教団からの圧力を避け、天台流の本迹一致を是とする風潮が高まっていくのです。

○ 高祖は「法華経の中にも迹門馳せ過ぎて、宝塔品より事起こりて寿量品に説き顕し、神力品属累に事極まりて候」（昭定八六七頁）と仰せです。現在の身延流に残る本迹一致は「馳せ過ぎ」た法華経、富士門流の「寿量一品二半、文底秘沈」は「事極まる」以前の御題目と、明快に「末法下種の御題目の所在」が記されるにもかかわらず、今も余門流が間違いを犯している土壌は、そんな高祖滅後の事情によるものです。

○ 弘通が伸展するかに見えて、中身は随他意で高祖のご本意が伝わらない、そんな危機的状況にいち早く気付かれ、上行所伝の妙法下種の宗義を再興されたのが門祖聖人です。

「開導聖人御指南」

門祖大聖人も、その乳に毒の入りまじりたるを、祖師ご弘通の時のもとの乳に毒をさりて、おし戻して我らに与え給いしが故に、八品門流再興の御親と申し奉るなり。（扇全五巻四頁）

「開導聖人御教歌」

此君のいまさざりせば遠つおやの 清きながれを誰かくままし

私たちが親しく「門祖聖人」と呼びする「門祖」は「八品門流の祖」の意味で、「門流」は私たちに至るご信心の流れのことです。正しくご信心が相続される「流れ」を汲めばこそ、高祖日蓮大士が示された久遠本仏のご信心を、今にいただくことができるのですが、残念ながら高祖の教えは数多の門流を生みました。そんな中で、唯一「高祖のご本意は法華経本門八品の御法門に示された上行所伝の御題目口唱の信心にある」と正しく伝えたのが「八品門流」です。今回はその八品門流に注ぐ、正しいご信心の流れを学びます。

○ 妙講一座に「南無当門勸請の列祖」のご文があります。冒頭に列なるお名前が、高祖から門祖日隆聖人へと相続された、正しいご信心の継承者です。

○ 十歳で高祖のもとに入門した日朗菩薩は、最も長く、常に師のお側で隨身給仕をされたお弟子で、多くの門弟の中で「師孝第一」と称されました。高祖の身延入山後は鎌倉教団を任され、高祖ご臨滅の際には六老僧にも選ばれて、実質的に高祖滅後の教団を統率されたのは、長く師と苦楽を重ねた故の信頼の証です。「給仕第一」と教えた日朗菩薩の門下は優れたお弟子を多数輩出し、最も栄えますが、そんな心身共に深く高祖の信仰を吸収された日朗菩薩のご教導の中から、八品門流は生まれます。

○ 高祖がご臨滅の枕頭に呼ばれ、帝都弘通を託されたのは、満十三歳の日像菩薩でした。日朗菩薩のもとで信行を磨き、高祖十三回忌の立教開宗記念日に御所の門前で帝都開教を宣言。以後、着実に弘通の足場を固めた迫力ある折伏は、高祖の再来を思わせたと伝えます。入洛二十七年目に後醍醐天皇から宗門勅許を得て、門下最初の勅願寺・妙頭寺を開創されますが、その間、既成勢力の圧力で三度も勅命により京都を追われています。皇族の血を引く大覚大僧正は、日像菩薩の辻説法に感銘して入門。貴種を誇らずお給仕に徹し、師のお師匠・日朗菩薩の晩年には六年に十二回も鎌倉に通い、師に代わってお仕えされます。西国十ヶ寺を建立された弘通家で、現証弘通で朝廷より高祖に「大菩薩」号を、日朗・日像両師に「菩薩」号を賜った功績もあります。（扇全二巻一四九頁参照）

○ 朗源師は自らを語るに少なく、事跡があまり残りませんが、優秀なお弟子を多数育てた謙虚で篤実なご信心振りが知られます。日霽師は両親が日朗菩薩に教化を受けた強信者で、大覚大僧正のご信心に随喜した両親によって妙頭寺に預けられ、法脈を継ぎます。○ こうして脈々と継がれた高祖の正しい教えの流れを体系化されたのが日存・日道の両上人です。門祖はそんな日霽上人に師事し、日存・日道の両上人に教学の手ほどきを受けられて、高祖の正流を継承する「八品門流」の祖とされるのです。

「開導聖人御指南」

門祖、宗内の習い損じを糺明して一大秘法を再興し、八品門流を立てさせたまえり。その八品門流とは、日像門流再興にして、上行所伝の題目宗なり。（扇全十一巻二九四頁）

「開導聖人御教歌」

末法へ流通の明鏡本八品 上行所伝五字の要法

満十三歳（一説には満十七歳）の門祖日隆聖人が上洛され、修学のために入られた妙本寺は、当時四条櫛笥に朝廷より広大な境内地を賜り、多数の坊舎を構える大寺院で、京都における高祖門下の中核寺院として二百人余の寺衆を擁していました。法難に耐えて法灯を護る日霽上人や、深い学解で徳望を集めて後進を指導する日存、日道の両上人との出逢いは、後に高祖の清流を宣揚される門祖聖人にとって運命的なものでした。ただ、当時の妙本寺の抱える事情は、若かりし日の門祖聖人のご奉公に大きな影響を与えていきます。そこで今回は、門祖聖人が上洛当初にご奉公の舞台とされた妙本寺の変遷について学びます。

○ 妙本寺はもと妙顕寺と称し、高祖門下で最初に帝都弘通に着手された日像菩薩の手で、元亨元年（一二二二）に醍醐天皇の宗門勅許を得て開創された門下最初の勅願寺でした。日像菩薩の入洛から二十七年目の建立で、当時はまだ小庵でしたが、十三年後の建武元年には勅願寺の綸旨を得るまでに発展し、帝都における地位を固めていきます。

○ ちなみに京都における門下最初の道場は、高祖ご直弟の中老日弁上人が、妙顕寺創建の十三年前に高祖ご直筆の御本尊と高祖御手自開眼の御霊像を千葉からご遷座して建立された青柳厨子本門寺で、後に本門佛立宗の根本道場・宥清寺の御宝前へと継がれます。

○ 妙顕寺が四条櫛笥の地に移ったのは、日像菩薩ご遷化の前年、暦応四年（一二四一）のことです。以後、法灯を継いだ大覚大僧正の活躍で朝廷の信任も益々厚くなり、日霽上人の頃には公家や武家との交際が活発に行われる京都の名門寺院になっていました。

○ この繁栄に怨嫉が起こります。嘉慶元年（一三八七）、妙顕寺安堵の綸旨に反発した叡山は、「天台法華宗の号を盗用するもの」との理由で妙顕寺を破却し、日霽上人も若狭小浜に避難する事態となります。六年後に帰洛が許され、妙顕寺再建が始まりますが、天台宗側は依然「妙顕寺」の寺号の使用を妨害します。やむなく鎌倉の妙本寺の寺号を移して再建が成るのですが、もとの寺号を名乗るまでに百三十年の時を要しました。

○ 日霽上人のご遷化は応永十二年（一四〇五）、門祖聖人がお仕えをはじめて七年目のことでした。ご晩年の妙本寺は天台寄りの本迹一致の邪義が山内を横行し、これに紛糾して離脱する門弟もあって、日霽上人が宗義の乱れに寛容だったのが原因との評価もありますが、天台宗の圧力の中で法城を護ることに腐心された跡とも見られます。

○ 日存上人をはじめ有力なお弟子を多く持ちながら、自らの後継者に公家の名門出身で若干二十歳の具覚月明を指名されたのも、そんな洛中復帰を果たして間もない妙本寺の未来を憂いた選択だったのでしょう。しかし、ご信心の継承者より政治力を頼んだ選択が、日霽上人亡きあとの妙本寺に更に大きな波乱を引き起こすことになるのです。

「開導聖人御指南」

折伏にあらずば三類の強敵きそわず。怨嫉の故に大小の難起こる。難起こらざれば経力顕れず。経力顕れずば弘まり難し（中略）門祖曰、本門流通不軽行相と云々。（扇全十卷八十七頁）

「開導聖人御教歌」

妙法は折伏せねばひろまらず 故に三類あだみねたまん

File.5 具覚月明

高祖はご自身に大きな迫害を加えた東条景信や良観、平頼綱を、自身を法華経の行者へと育てた善知識と仰せです。ご信心を邪魔する怨嫉に満ちた人々との出逢いは嫌なものですが、日々安穏な環境よりも、それは自らのご信心を鍛える縁(善知識)ともなるのです。

そんな意味で、門祖日隆聖人にとつての月明は、若き日の最大の善知識でした。そこで今回は、門祖聖人のご奉公に立ちほだかった具覚月明という人物について学びます。

○ 至徳三年(一二八六)、公家の名門、太政大臣三条実冬の四男として具覚月明は生まれます。ちょうど年齢的には、門祖聖人より一歳の年少になります。

○ 妙本寺に入寺したのは満十六歳の年と伝えますので、門祖聖人の四年後輩です。翌年得度を許され、日霽上人の弟子となつて具覚と称しますが、その年の暮れには早くも妙本寺の後継住職としての付属状を受けています。得度一年に満たない沙弥への付属は、天台宗の圧力が強まる中、名門の血筋に寺門存続の期待をかけたのかも知れません。

○ お師匠の日霽上人がご遷化された応永十二年(一四〇五)十一月、具覚は若干十九歳で住職を継ぎ、自らを「月明」と称します。高祖の門下が「日蓮」の一字を頂いて「日号」を名乗るのに逆らい、あえて「月」の文字を用いたところに慢心の一端が現れるのです。

○ そもそも「日蓮」の名は、高祖が法華経本門八品の御法門より選ばれた深い意味が込められていますので、対して「月」を用いれば迹門を意味する謗法になります。早速日存・日道の両師や門祖聖人はお折伏をされますが、若い住職は聞き入れませんでした。

○ この年、日存・日道の両師や門祖聖人らは宗義の刷新のため、一旦妙本寺を出られています。きっかけは、將軍義持の下間に対して月明が折伏の宗義を示さず、事なかれ主義で迎合して得々としていたためで、体制におもねる姿勢を強く折伏されたのです。

○ しかし月明の慢心はエスカレートし、宗義は益々天台寄りの本迹一致へと傾いていきます。更には、月明が入寺の際に連れてきた寺侍が寺内を横行し、武力を背景に太政大臣の息子としての権勢を振るうようになって、当然、寺内の風紀も乱れていきました。

○ 名誉欲も旺盛だったのでしよう。朝廷に働きかけて、二十五歳で権大僧都、二十七歳で僧正に任ぜられています。しかし、この月明の僧正叙任は比叡山の反感を買い、妙本寺は破却されて、月明は自身の領地である丹波の知見へと避難するのです。

○ 妙本寺復興の動きは、間もなく日存上人を中心に始まりますが、月明は知見から弟の具円を派遣して妨害。やがてその具円とも争い、別に本仏寺を建てて京都に戻り、それを妙本寺と改称したのが満三十歳のときです。二年後には門祖聖人に刺客を差し向けますが、以後は門祖聖人が独自の弘通の道を歩まれるため関わりは途絶えます。

○ 門祖聖人が厳しい弟子教育や信徒育成をされたのも、そんな善知識の故かも知れません。

「開導聖人御指南」

迹門に譬える月の文字を取りて月明と名のらせたまうこと、これ迹門を面として本迹一致を立てる看板なり。(扇全一卷一五九頁)

「開導聖人御教歌」

あほう程つきあがりするものはあらし 故にそだてはきびしきぞよき

File.6 日存・日道の両上人

若き日の門祖日隆聖人に最も大きな影響を与えた方は、日存・日道の両上人です。少年の頃にお二人を頼って上洛され、青年期にはお二人と共に行動し、ご晩年のご著述にも「存道両師の仰せにいわく」等とお二人の教えを大切に守る記述が随所に見られます。

良き師を求めて学び、師の教えをいつまでも忘れずご奉公させていただく「給仕第一」の宗風を、門祖聖人はお二人を通して、私たちに教えられているのです。

○ 日存・日道の両上人は、門祖聖人の俗縁の叔父と伝わるほか、その出自には諸説があります。ただ、詳細な実績が遺りませんので、門祖聖人との関わりを通じて、わずかに年譜を追うことができるのみです。様々な考証の中では、門祖聖人のご出身である桃井家の、ご家臣の家系から出られているとする説が有力なようです。

○ 門祖聖人が上洛して妙本寺に入られた応永五年、日存上人は十六歳上の満二十九歳、日道上人は二歳上の満十五歳で、特に日存上人は、既に妙本寺の多くの学僧を指導する教育者であり、日像門流が伝承する本門八品の宗義の継承者としての立場にありました。

○ お二人の関係を、門祖聖人は「師弟」と記されています。また、お二人の名前を記される際には若干のニュアンスの違いがありますので、門祖聖人にとって日存上人は教学の師、日道上人は同学の先輩という間柄であったと考えられています。

○ 応永十二年、妙本寺を継いだ月明の専横を日存上人が折伏。聞き入れない月明に対し、日存上人は日道上人や門祖聖人らと七名で、正しい宗義を守るために一旦妙本寺を出られます。宗義継承の核を担う人材流出は、それ自体が大きな折伏でしたが、日存上人を中心とする改革派は、以後お寺の外から妙本寺の法灯復興の激しい折伏をするのです。○ 日存上人らが当初の拠点としたのは、五条坊門西洞院の柳酒屋内の一室でした。そこは、日像菩薩の帝都開教当初の入信者の屋敷で、日像菩薩の旧跡であるため大覚大僧正もたびたび御講を開いています。日存上人は、像門の清流を継ぐ意を込めて、この新たな拠点を「像師室」と名づけました。ちなみにこの像師室が、後に妙蓮寺となります。

○ 像師室に移った当初、門祖聖人は日存上人の勧めで各宗本山や日蓮門下の碩学を訪ねる遊学をします。日存上人の指導で研鑽を重ねた応永十七年には、存道両師と共に当時の勝劣派の第一人者とされる日陣師を訪ね、八品教学の完成度の高さを確認されるのです。○ そんな日存上人らを慕って学徒が増え、像師室が手狭になったため、洛北内野に草庵を構えて「本応寺」と称します。二年後の応永二十二年には市中に移り、盛況を増します。が、叡山に破却された妙本寺復興のために一旦閉鎖。信心本意な存道両師の選択でした。○ 応永二十八年に日存上人、同三十一年に日道上人が、それぞれ内野の草庵でご遷化されます。三年後、門祖聖人は本応寺を復興し、高祖の清流継承への遺志を継ぐのです。

「開導聖人御指南」

開山、存道の両師を敬いたもうこと、御聖教三千余巻、在々所々に存師仰云、道師仰云と遊ばしたり(中略)これ、蓮祖正統当門流伝法相承の大導師なり。(扇全一卷一七九頁)

「開導聖人御教歌」

いか程に身のさいはひを得しとても もとの教への親をわするな (題・教への親とは師匠也)

大きな権力に立ち向かい、道を正すために諫言するのはとても勇気のいることです。

開導聖人は「権現様、駿府の城にましまししとき、諫言は一番槍より難しとのたまうことあり。一番槍は誉を遺す。諫言は永の暇かお手打ちか也」とその難しさを記され、「かく身を捨てて、苦勞遊ばしたる門流再興なれば、南無妙法蓮華經の一字一字が御開山のお慈悲の肉、本因本果の骨髓也(扇全一卷一七四頁)」と門祖日隆聖人が高祖の御本意を正しく護るために、妙本寺の貫首月明に諫言された御意を御指南されています。

今回は、門祖聖人の「月明諫暁十ヶ条」を中心に、その正法護持の精神を学びます。

- 私たちの門流(教えの流れ)は、高祖の多くのお弟子方の中でも最も正統の日朗菩薩、日像菩薩と継承されますが、日霽上人の跡を受けた月明の代に大きな危機を迎えたことは既に学びました。若輩の月明の慢心は明白ですが、しかし彼は大寺の貫首の地位にあり、名門三条家の血統と武力を背景に君臨しています。当然、折伏は容易ではありません。
- しかし門祖聖人は、月明が妙本寺を継いだ応永十二年、そして応永十七年と応永二十五年の三度にわたって伝統ある妙本寺を出られていますので、お寺を出るほどの覚悟で折伏をされ、一方で妙本寺が高祖の清流を取り戻す可能性があれば、片意地を張らずに復帰される柔軟性をお持ちだったことが分かります。二度目の帰山の際には、月明に理不尽な起請文まで入れています。法のため、お寺のための信心を何より優先されたのです。
- 中でも応永十七年の妙本寺退出のときには、十ヶ条に及ぶ諫言を以って月明に改良を促しています。このときの折伏は、教えの筋道よりも月明の信仰姿勢を糺す内容が中心ですが、そこには門祖聖人のご信心に向かう真摯なお姿を拝見することができます。
- 十ヶ条の一番目と二番目は、先師が寛容だったのをいいことに、だらしない修行を横行させる点を折伏しています。これは先師の慈悲を逆手に取り、お徳を穢すものです。
- 三番目は妙法の受持こそが末法の戒律であることを誤って解釈し、僧の品格を損なう行為を正当化する点への折伏です。妙法の功德で凡夫の身に戒徳を具えるのは、弘通を第一とする信心堅固の賜物です。御題目の信者なら何でも許されるものではありません。
- ほかに、口唱を軽視し厳しい天台の懺法を用いること、法要の場に武装の部下を伴って威を誇ることに、寺内に武器を蓄えること、説法の場合に箱を出して金銭を集めること、権力に媚びて位階を求めること、信心の徳の優れた人を用いないこと、家柄が良ければ信心未熟でも位階を与えること等を諫めています。これらは、世俗的な価値観で身を飾ることを廃し、誇り高い如来使としての「高潔な振舞」を求めているのです。
- 諫められた月明の怒りが目に映るようです。しかし、我が身に難が降りかかろうと、高祖のご本意を護るために敢えて折伏するのが、慈悲を第一とする佛立信心なのです。

「開導聖人御指南」

もとより臣として君を諫むるは戦場の一番槍よりも難し。しかれども諫むべきを諫めざるは不忠不幸也。信者の中に謗法を責むべきを責めざるは同罪也。(扇全一卷三一七頁)

「開導聖人御教歌」

にくまるる事は誰でもいやなれど それを折伏するが慈悲なり

File.8 六剣士の「法難

み仏は「如来の現在すら怨嫉多し。況や滅度の後をや」と仰せです。正法の弘通は相手の罪障を刺激して怨嫉となり、時に大難となって我が身に降りかかるのは必然です。

しかし、そんな怨嫉をもたらす「逆縁の衆生」こそ、末法で妙法の下種を受けるべき「正機」なので、恐れてはなりません。妙法のご加護を得れば、逆縁の迫害者もまた篤信の行者となることを、門祖日隆聖人は六剣士のご法難を以って私たちに教えられました。今回はそんな「逆即是順」と折伏に励むご信心を、門祖聖人のご法難から学びます。

○ 応永二十五年、門祖聖人満三十三歳の年の月明への折伏は、厳しさを極めたようです。月明と決別し、三度目の妙本寺出寺をされた門祖聖人は、ひとまず一旦閉鎖した本応寺に入りますが、間もなく小袖屋・山本宗句宅の土蔵に移られます。この「土蔵に隠れた」という行動が、門祖聖人周辺の切迫した危険な状況を物語っています。

○ 山本宗句という人は、存道両師ら妙本寺改革派を支援する強信者で、京菓子製造御をする大店を営んでいました。門祖聖人を生涯外護し、後に本応寺を再建する際には私財の大半を御有志された篤信家ですが、残念なことにこの当時、宗句の家内は月明に籠絡された貫主親派ともいべき立場にありました。

○ そんな家内の密告を恐れ、宗句は土蔵に匿った門祖聖人に、製品の「須浜」というお菓子を紛らせて密かに食事を運びます。しかし、それはやがて家内の知るところとなり、「本山を追われるような人を匿えない」と月明に訴えられてしまうのです。

○ 危険を察知した門祖聖人は、像師室を改修した「大成坊」という宿坊に移られます。しかし、これも、月明の探索の手に知られるところとなり、月明の手下の寺侍によって暗殺団が組織されるのです。

○ 月明の命を受けた水野半左衛門、吉川勝十郎、西尾宮内、桜井彦十郎、尾崎伝内、田中藏人の六人は、夜陰に紛れて大成坊に忍び込みます。ちやうど門祖聖人はお看経の最中で、賊の侵入にも気付かず、一心に口唱される尊いお姿であったと言います。

○ そのとき、隙を窺う六人に、御本尊から大光明が一闪します。この妙不可思議の現証に腰を抜かした暗殺者たちは、門祖聖人の威徳にひれ伏し、その場でお懺悔するのです。お許しを得た六人は門祖聖人を新たな師とし、改良を誓います。そして内野の存道両師の警護に向かった水野と吉川の二人は、後に発心得度。門祖聖人と共に三井村のご弘通に向かった他の四人は同地に定着し、今も法華宗の檀徒として子孫を遺します。

○ 憎悪の念に心を狂わせる暗殺者さえも、たちまち改心させてしまう妙不可思議な現証。この経力を以って、逆縁正意の末法の弘通をせよと六剣士のご法難は教えています。

「開導聖人御指南」

末法は逆縁正意なり。必ず三類の強敵起こり、次に大難、次に経力顕る。よって弘まる。故に心せよ。(扇全十巻九〇頁)

「開導聖人御教歌」

さかさまに結ぶ糸にしも法の花 そしるにさへや香にうつるらん

File.9 三井村の火伏せの現証

高祖日蓮大士は「末法の弘通は道理(教えの筋)が通っていること」、証文(み仏がお経文に真実と証明していること)よりも現証(目に見えた御利益で証明すること)「仰せです。道理も証文も正しい信仰を見極める大事な指針なのですが、末法の凡夫は自分の目で確認しないことには、妙法の妙不可思議な力を信じられないためです。門祖日隆聖人の壮年期のご弘通は、そんなお祖師さまの教えを忠実に実践する現証布教でした。

今月から門祖聖人のご弘通の様子を中心に、現証の大切さを学ばせていただきます。

- 応永二十五年の六剣士の法難のあと、門祖聖人はしばらく京都を離れて各地にご弘通の跡を遺されています。最初に現在の寝屋川市にあたる河内国三井村に向かわれたのは、門祖聖人に帰伏した六人の刺客のうち、西尾氏や桜井氏が「自分たちの縁故がある同地に避難を」と進言し、これを容れて不穏な空気の京都を離れるためだったようです。
- 六剣士のうち、存道両師の警護に回った水野・吉川の二人を京都に残し、淀川沿いを下る一行を、雁の群れが道案内をするように先行したようで、本厳寺歴譜には「雁行に随い当地に来臨す」とあります。ちなみに雁金は門祖聖人のご実家の家紋でもあります。
- 三井村に到着後、門祖聖人は西尾氏らから事情を聞いた村の長老たちの出迎えを受け、自宅に案内されます。そこで長老たちから「この村は昔から火災が多くて、皆の心が安まらない。あなたのような尊い僧に長く留まって欲しい」と懇願されるのです。
- 同地は川からの風が強く、木々の自然発火に苦しむ事情を聞いた門祖聖人は、「これは妙法のご守護をいただく以外に救われる術はない」と諭され、上行所伝の妙法の功德を諄諄と説きます。しばし聞き入った聴衆は入信を決意し、村の人々を集めるのです。
- 妙法の御利益について御法門される門祖聖人の前に、村中から集まった老若男女は次々と随喜入信し、御本尊が奉安された各家から口唱の声が響くようになりました。以来、めったに火災が起こらなくなり、一村そのまま熱心なご信者となって今日に至ります。往時のご信心の徹底ぶりは「こじきもこの村には御題目を唱えて入った」と伝わります。
- 三井村には古くから天台宗の本法寺があり、円澄という僧がいました。門祖聖人の一村教化を知って法論を挑みますが、逆に門祖聖人の学識と威徳に敬服し、日慶と名をいただいて弟子となります。本法寺も本厳寺と改称し、河内のご弘通の中心となるのです。
- 三井村のご奉公は、門祖聖人の最初の一村教化であり、他宗寺院の改宗第一号となりましたが、これは同地の人々が一番困っていた問題に正面から取り組み、一人ひとりに口唱をさせることで現証を顕したのが一番の要因です。門祖聖人は同地に約三年滞在されますが、三年かけて口唱の信心を教えられたことが、同地に法灯を定着させたのです。

「開導聖人御指南」

弘通せんと思う人々は口唱に励むべし。口唱せずば利生顕れず。顕れざれば末代の愚者は助けがたし。(扇全六卷二一五頁)

「開導聖人御教歌」

火盜病不慮の諸難をまぬがれて 如説信行弘通成就

File.10 尼崎・変成男子の現証

ご弘通は新たな縁を求めて妙法下種の輪を拡げ、その新たな縁者が現証の御利益によってご信心をしっかりと掴めるようお育てする、そんなご奉公の積み重ねです。

河内の三井村でご奉公されていた門祖日隆聖人が、新たな縁を得て尼崎にご弘通の舞台を移し、現証によって未来弘通の一大拠点を築いていかれたご様子は、そんな意味で妙法弘通の良きお手本です。今回はそんな門祖聖人の尼崎でのご奉公を学ばせていただきます。

○ 門祖日隆聖人が三井村の人々に口唱のご信心を指導されていた頃、京都の内野の草庵には日道上人の教化を受けた尼崎の豪商・米屋二郎五郎の姿がありました。商用で上洛するたびに日道上人のもとに出入りしていた二郎五郎が、河内で弘通される門祖聖人のことを聞き、上洛の帰途に三井村を訪ねたのを機縁に親交が結ばれたようです。

○ 当時の尼崎は大阪湾に面した街道の要衝で、港も西国の農産物を東国や京都に仲介する集散地として賑わっていました。二郎五郎の商いは、そこで物資の取引から船舶の手配、宿の提供まで手広く行う「問丸」です。ちなみに後年、門祖聖人が港伝いに短期間で弘通の足跡を遺されたのは、この二郎五郎の問丸が役立ったと考えられています。

○ 門祖聖人が尼崎への移住を決意され、二郎五郎の屋敷に止宿されたのは応永二十七年、御年満三十六歳のときです。同年、尼崎の本興寺が創建しますので、それ以前から二郎五郎の求めに応じ、三井村からたびたび尼崎のご弘通に足を運ばれていたのでしょう。

○ 同地は室町幕府の管領家・細川満元が治めていましたが、世継ぎの男子が得られず困っていました。門祖聖人が尼崎に移られた頃にもご夫人が懐妊されるのですが、高名な占い師の見立ては胎児はまたもや女子とのこと。がっくりする満元に、占い師は「男子を得なければ仏に祈りなさい。ちようど巽(南東)の方角に有徳の僧がいるので訪ねなさい」と告げます。その方角で活発にご弘通を展開していた門祖聖人に使いが飛びました。

○ 話を聞いた門祖聖人は、「私は祈禱師ではない」とお断りになったようです。妙法の現証は、信者の正しい口唱の中に顕れるのですから、世間の拝み屋と同列の扱いでは御法の意に適いません。しかし、領主満元の礼を尽くした再三の要請に門祖聖人は折れ、満元の館で十七日間のお助行をされるのです。

○ 思うに門祖聖人は、領主満元との新たな縁を、尼崎弘通に繋げていこうと考えられたのでしょう。弘通の祈りは必ず現証となって顕れます。果たして満元夫人は無事に待望の男児を出産し、細川夫妻は熱心な御題目の信者となるのです。

○ 妙法の御利益に随喜する細川夫妻の寄進によって、尼崎本興寺は建立されます。この本興寺は、のちに八品教学を護る中心の道場として栄えていきますが、発端は個々の願いをご弘通に結びつけ、新たな縁を大切に育てる門祖聖人のご奉公にあったのです。

「開導聖人御指南」

わが事、願わんより、弘通広宣が所願成就の基となり。(扇全十四卷三七五頁)

「開導聖人御教歌」

御題目唱へてしるしなきなれば たれ妙法とあがめ仰がむ

File.11 尼崎・本興寺建立の奇瑞

み仏のご本意に適うご弘通に努めれば、必ず御法のご守護があります。しかもその証は目に見えた現証となって顕れて、「確かに導かれている」と気付かせていただけなのです。門祖日隆聖人の重要な弘通拠点の一角へと成長し、本門八品・上行要付の宗義を傳承する法城となった尼崎本興寺の建立にも、そんな御法のご守護を感じさせる現証がありました。今回は本興寺建立の際の奇瑞に、御法のお導きを知るご奉公を学ばせていただきます。

- 門祖日隆聖人のお助行によって、尼崎を治める細川満元の夫人が無事に男子を出産されたことを慶び、細川夫妻は門祖聖人に寺院の寄贈を申し出ます。早速、建立用地を決めるため、市中に出られた門祖聖人は、若宮八幡宮で不思議な出来事に遭われるのです。
- 八幡宮は応神天皇を祀る神社ですが、奈良時代に「日本古来の神々は仏教の守護神の化身」とする神仏習合の考えが生まれ、それは明治政府が神仏の分離をするまで続きます。ですからお祖師さまも、法華経の行者の守護の任を怠る八幡大菩薩を折伏されていますし、門祖聖人もまた、法華経の守護神である八幡神の社に立ち寄られたのでしよう。
- とところが奇妙なことに、その社の祭神の前に掛けられた帳(戸帳)が片方しかありません。不思議に思って神職に尋ねると、四十年ほど前に八幡宮に伝わる神剣と共になくなったとのこと。ただ、その片方残った錦織の帳は、門祖聖人には見覚えがあるものでした。
- というのも、門祖聖人がご誕生されたとき、桃井の館にお祝いに訪れた白髪の老人に献上された刀が、同じ錦の袋に包まれていたのです。それは尚儀公が、益子夫人の懐妊の日に夢で見たのと同じもので、門祖聖人はこの刀にちなんで長一丸と命名されたのです。以来、門祖聖人は守り刀として携えられていましたので、それを懐から出して比べると、袋の錦は確かに同じ織物です。刀もまた、八幡社に伝わるものと特徴を一にしています。この不思議な一致に、門祖聖人は「あの老人は八幡大菩薩の化身に違いない」と感得され、この地を道場建立の場所に決められるのです。
- 道場は応永二十七年から三年かけて諸堂を完備し、堂々たる威容を誇る法城となりました。そして本門法華再興教学精舎を略して「本興寺」と寺号公称するのです。門祖聖人は後に同寺に「勸学院」というお弟子養成の学校を設立され、本興寺を教義傳承の拠点とされます。また、ご自身の御法門も「尼崎流」と呼ばれるようになるのです。
- かつて尼崎の八幡社で紛失した帳と神剣が、遠く富山へ門祖聖人ご生誕のお祝いとして届けられ、それを携えた門祖聖人が時を隔てて元の社をお訪ねになる……。この凡夫の思慮を超えた不思議な因縁こそ、御法のお導きの証です。果たして尼崎の新法城・本興寺は、京都の本能寺と並んで門祖聖人の門流弘通の中心となり、しばし清流を伝えます。
- 如説行の先には、予想だにしない不思議なご縁が顕れます。これが法華経の行者を常に守護される御法の導きです。有難く受け止め、縁に逆らわず弘通に励むことが大事です。

〔開導聖人御指南〕

仏祖照覧、賞罰現前、これを信ずべし。(扇全十六卷三〇四頁)

〔開導聖人御教歌〕

文字ならばかかる不思議やなかるらん 妙のみのりは仏なりけり

File.12 越前・色ヶ浜の一村教化

末法のご弘通の決め手は現証の御利益ですが、この現証を生み出すには、徹底した「謗法払い」が欠かせません。なぜなら謗法払いは、純粹な妙法への「信」を育てるからです。

今回は、そんな謗法払いが一村教化へと繋がった事例を、門祖日隆聖人の代表的な現証弘通の一つ、越前桑名の色ヶ浜(福井県敦賀市)でのご奉公から学ばせていただきます。

- 尼崎に本興寺を建立後、しばらく同地でご弘通されていた門祖日隆聖人は、満四十一歳の応永三十三年、元家臣の日永師三回忌の供養のため、故郷の越中浅井嶋村を訪ねます。
- 日永師が門祖聖人のお弟子となった経緯は、応永二十三年、門祖聖人の生家・桃井家の家老・中村元助が反乱を起こし、桃井家を乗っ取った桃井騒動に端を発します。当時、日永師も桃井家に仕える家老で、中村元成と名乗っていました。桃井家の郎党を組織して逆臣元助を誅せねばと考え、その盟主と仰ぐために旧主の門祖聖人を訪ねるのです。
- 門祖聖人は涙して忠臣たちの窮乏を聞かれたと言います。ただし、出家の身での出陣はお断りになり、代わりに旧臣たちに宛てた書状を認められます。更に大将なしに戦は出来ないと元成に、門祖聖人数え十二歳の軍装のご木像を与えるのです。果たして「鏡の御影」と呼ばれた旧主のご木像と書簡は、たちまち旧臣を集めて士気を上げ、一方逆臣元助側は旧主の威光を恐れて戦意喪失し、元助は自害を遂げるのです。
- 乱の平定後、桃井家は館に一字を建立し、元成寺と号します。そして中村元成は桃井家一党の菩提のために出家得度し、日永と名を賜るのです。同寺は後に高岡に移って本光寺と称します。また、元成寺の跡地は誕生寺が建立され、門祖聖人のご眞骨を伝えます。
- さて、日永師年忌の帰途、縁故を訪ねてご弘通の旅を進める門祖聖人は、船便で敦賀に向かわれますが、このとき暴風雨に遭って漂着されたのが色ヶ浜でした。人気のない寒村に降り立ち、一軒の家を訪ねた門祖聖人は、村長を務める衰弱した老婆から村中が疫病に侵され瀕死の状態にあることを聞き、早速家中の謗法を払ってお助行するのです。
- 村長とその家族はたちまち現証を顕し全快します。話を聞いた村中の人々は、それぞれ家の禅宗の御本尊を外して門祖聖人のもとに集まりました。そこで門祖聖人はそれらを浜辺に積み上げて一斉に浄火し、一同と祈願の口唱をします。結果、次々と病氣平癒の現証を顕した村人は揃って改宗し、本門法華経の御題目の信者となりました。
- この現証を見た禅寺金泉庵の庵主・静慮は、門祖聖人のお弟子となって日実と名を改め、禅寺も本隆寺と改称します。以来、色ヶ浜では明治になるまで全員法華宗を守り、また本隆寺では門祖聖人が浜辺でご祈願された際に座られた巨石「祈祷石」を伝えます。
- 妙法の御利益をいただくには一点の曇りもない御本尊への「信」が不可欠で、そのためには従前の心の抛り所をさっぱりと絶たねばなりません。謗法払いが大事な所以です。

「開導聖人御指南」

謗法を払うて願えば、たちまち御利生をいただく御法なるが故に、実に弘まり易きこと、この上なき大法也。(扇全十三巻二頁)

「開導聖人御教歌」

謗法をはらはな利生あらわれず 雲がはれねば月もおがめず

File.13 敦賀・大勝寺の改宗

末法の凡夫の頑迷な心に「真のご信心を起こす現証」は、折伏から生まれます。高祖が「末法は折伏」と説いて範を示され、開導聖人もまたご晩年に、徹底した折伏行の実践を指導された所以です。今回は門祖日隆聖人の大勝寺円海法印への三日間にわたる折伏から、粘り強くお折伏をさせていただき、ご奉公の大事を学ばせていただきます。

○ 門祖聖人が色が浜に漂着されたのは、日永師の三回忌で故郷にお帰りになった帰りに、角鹿の津（現敦賀市）に住む紺屋五郎右衛門を訪ねようと船便を利用されたためでした。そこで色が浜での一村教化のあと、門祖聖人は再び船便で角賀に向かわれます。

○ 紺屋は角賀の商人で、桃井家のもと郎党、またはその有縁の人と考えられています。角賀に着いた門祖聖人は早速紺屋宅に投宿され、夫婦を折伏して教化。紺屋に安田の姓を与えて、五郎右衛門に妙源、その家内に妙徳の法号を授けられるのです。一説によると、五郎右衛門は当時病床に伏していて、門祖聖人のご祈願による病氣平癒の現証を得て入信したとも伝わります。

○ 安田家は子孫の代まで門祖聖人の箆笥や什器等の日用品を伝え、門祖聖人が敦賀地方をご弘通された際の拠点として、たびたび利用されたと考えられる篤信のご信者に成長していきます。ただ、この入信以前は地元の古刹・真言宗大勝寺の有力檀徒でしたので、五郎右衛門の改宗を聞いた大勝寺の円海法印は、怒って門祖聖人に法論を挑むのです。○ 円海は弘法大師の秘法を相承する真言密教の律師で、住職を務める大勝寺は十一坊の塔頭（寺内の小寺院）を擁する大寺院でした。氣比神宮の別当職も兼ねていましたから、地元宗教界では重鎮です。その円海の呼び出しを受け、門祖聖人は大勝寺を訪ねます。

○ 法論の場は大勝寺の本堂です。円海の主張を丁寧な退け、真言密教の邪義を破し、法華経本門に説かれる妙法の功德を諄々と論ず折伏は、三日三晩にわたったと言います。その間、五郎右衛門夫婦はお傍に侍し、食事のお給仕など懸命に門祖聖人を支えました。○ 真言宗の高位の僧として、また地方の実力者として、簡単に非を認めることが許されない円海ですが、時に厳しく、時に慈愛に溢れた言葉で法華経の真実を説く門祖聖人のご信心に打たれます。即ち第三夜に至ってついに折れ、門祖聖人のお弟子となるのです。○ 帰伏した円海に、門祖聖人は正法院日従の名を授けます。日従師は大勝寺の僧衆にも本門法華経への改宗を勧め、大勝寺そのものも御本尊を改めて、門祖聖人から本勝寺の名をいただくのです。日従師は後に、正法寺を創建するなど弘通の跡を遺しています。○ 折伏は「負けん気」と「根気」と「根気」と「慈悲」と教わります。様々な立場や信念を持つ人の心を揺り動かし、新たな「弘通の人」を生み出すのは、不退転のご信心から出る熱意、つまり不軽流の折伏なのです。

「開導聖人御指南」

いかほど口唱信行すとも、折伏せずば謗法払い出来ず。故に利生も顕れず。されば一遍の口唱にも折伏は忘るべからず。（扇全十四巻二九一頁）

「開導聖人御教歌」

信なくば御利益もなし御利益は 折伏よりぞあらはれにけり

File.14 本能寺の再建

門祖日隆聖人がご生涯に建立された寺院は、京都本能寺、尼崎本興寺をはじめ、富山の元成寺、堺の顕本寺、河内に二か所の法華堂、宇多津本妙寺に備中高松本隆寺。改宗させた寺院は北陸に本隆寺、本勝寺、本承寺と、三井の本厳寺、兵庫の久遠寺、淡路では妙勝寺と妙京寺。復興させた寺院として牛窓本蓮寺と実に十六か寺に及びます。一か寺の建立も困難な時代、広範囲に弘通の拠点築いていかれた思いを、本能寺建立から学びます。

○ 尼崎の本興寺と並ぶ門祖聖人の二大弘通拠点の一つで、後に開導聖人がお教化を受けることになる京都の本能寺は、月明の専横に対して妙本寺を退出し、像師室に拠っていた日存上人らが、同士が増えて狭隘になったために内野の草庵に移って「本応寺」と称したのが始まりとされます。門祖聖人が満二十八歳の応永二十年のことでした。

○ ただ、当時の内野(今の西陣近郊)は人家もまばらでしたので、市中に出て活発な弘通をするために、二年後には仏光寺通りに堂舎を建てて移転します。本能寺誌が、このときを以てその創建にあてる法城の主を、門祖聖人は「日存聖人」と記されています。

○ その後、応永二十年に比叡山の衆徒に破却された妙本寺の跡地・四条櫛笥に堂宇が建立され、月明一派から本応寺の寺号と妙本寺より移されていた仏具の返還を求められます。日存上人らが妙本寺復興の道場を二手に分けることを避け、仏光寺通りの本応寺を解散して内野の草庵に戻られたのは応永二十五年(または二十二年)頃のことでした。しかし、月明一派の手に移った櫛笥の本応寺は内紛が絶えず、やがて立本寺と改名し、日存上人創建による本応寺は完全に消滅。堂宇も放火で消失したとの伝もあります。

○ 以来帝都では、内野の草庵の存道両師を中心に高祖の清き法脈が護られていましたが、門祖聖人満三十六歳の年に日存上人が、満三十九歳の年に日道上人が相次いでご遷化。尼崎でご弘通される門祖聖人は、お二人の遺志を継いで再び帝都に本門の妙法を弘通される機会を、密かに願われていたことでしょう。

○ 円海帰伏の三年後、六剣士の法難の際に門祖聖人を匿った篤信の町衆、京都の小袖屋・山本宗句が尼崎を訪ね、京都に一字を建立するので上洛して欲しいと懇願します。門祖聖人は要請に応え、本応寺の寺号を復活して帝都弘通を再開。満四十四歳のときでした。○ 四年後、如意王丸という公家の信徒の寄進を受け、市中の三条西洞院に広大な地所を求めて移転し、本能寺と寺号を改めます。門祖聖人の現証弘通が成果を現し、宗句寄進の道場では増え続ける信徒に対応できなくなったためです。存師十三回忌の年でした。○ ご弘通の便宜を第一に考えられた門祖聖人には、常にご弘通の伸展と共に強力な外護者が現われて、より便利な場所にと、より大きく立派な道場にと、その拠点としての法城が自然な流れで出来ていくようです。お寺の盛衰の鍵はご弘通にあり、です。

「開導聖人御指南」

寺を建立するは弘通所なり。転法輪の処なり。本尊を安置し、参詣せしめて、法を聴聞せしめんがためなり。ほかの事なし。(扇全二十九巻二九六頁)

「開導聖人御教歌」

御弘通を大事と祈る心あれば よろづの願ひ中にこもれり

File.15 東朝西隆

お祖師さまの教えの真髄は「本門八品に顕れた上行所伝の妙法にあり」、これがお祖師さまの教えの正統を継ぐものか、あるいは門祖日隆聖人による新しい解釈の一つに過ぎないのかは重要な問題です。この問いに決定的な答えを出し、お祖師さまの清流を継ぐ正しい教えと証明したのが岡宮光長寺(静岡県沼津市)の本果院日朝師との交流でした。俗に「東朝西隆」と呼ばれるお二人の出会いの意味を、今回は考えてみます。

- 門祖聖人の著作『四帖抄(法華天台兩宗勝劣抄)』は、その膨大な御聖教(門祖の書かれた御指南書)の最初とされています。伝によれば、本応寺再興の永亨元年(一四二九)に日蓮門下の洛中二十か寺の本山に回送され、本門八品の宗義を宣揚する本応寺復興の意義を示された、とのことですが、内容的には「ご自身の門下を教育する姿勢で、「存道兩師から受け継いだ大事な御法門なので安易に口外してはならない」との記述もあります。年齢的にも永亨元年の門祖は満四十四歳、お弟子の育成に着手された頃と符合します。
- この『四帖抄』を目にして感激し、京都の門祖聖人を訪ねたのが日朝師でした。門祖聖人より一歳年長の日朝師は、当時すでに関東屈指の学僧で、七十五人のお弟子を指導していました。日朝師は当時主流の天台流の本迹一致に疑問を持ち、富士流の本迹勝劣の影響を受けつつ、光長寺に密かに伝わる本門八品の宗義に関心を持っていたと言います。
- 光長寺はお祖師さまが文永二年に同地に草庵を結ばれたのを始めとし、以来高祖ご直弟の日春師らのご弘通を開かれた高祖直建の寺院です。しかしその後の百余年の歴史は、あるときは身延派に付き、またあるときは富士派に属するなど、教えの流れを一定にしなかったようです。政治的な事情もあったのでしょう。ただ、このお祖師さまのお膝元の伝統寺院には、本門八品正意の宗義が同寺第二祖日春師以来伝承されていました。
- 日朝師の上洛は、『四帖抄』発表から六年を経た永亨七年です。本能寺で面談したお二人は、連日法談を交わしてたちまち肝胆相照らす仲になったと伝えます。この交流を賀して、日朝師から本能寺に高祖ご真筆の御本尊が贈られ、本興寺にはやはり高祖ご直筆の軸物が納められました。門祖聖人はお二人の法談をもとに『十三問答抄』二巻を著され、ご自身の認められた御本尊と共に光長寺に贈られています。以後、日朝師のご弘通は関東に多大な影響を与え、一時は富士の大石寺でも本門八品を唱えています。
- お二人の出逢いは、お祖師さまの信任が最も篤かった日朗菩薩、日像菩薩を経て京都に入り、日存・日道の両師によって教学理論が築かれた「本門八品に顕す上行所伝の妙法」を口唱するご信心が、関東でも高祖ご直弟の系譜の中で連綿と生き続けていたことを確認する結果となりました。このお祖師さまの清き流れの客観的な証明に、お二人は「どれほど勇躍歓喜されたことでしょう。佛立信心は、そんな法脈を継いで今日に至るのです。」

「開導聖人御指南」

蓮師、日隆と再び出世ましまして、八品所顕、上行所伝を再興、ご弘通ましますこと、御書を拝して知りぬべし。(扇全二巻二八七頁)

「開導聖人御教歌」

そしさまの御たましひをおがんだか 上行そでの妙法の五字

File.16 眼病平癒と湧き水の現証

本能寺を復興して京都のご弘通が軌道に乗りはじめた頃、門祖日隆聖人は南河内のご弘通にも着手されています。ちょうど尼崎本興寺などと平行して複数の寺院運営を行い、お弟子の育成や御聖教の執筆等とご奉公が多方面に広がる多忙な時期にあたりますが、それでも自らの足で、ご弘通を開いていかれたご様子に、現場重視のご奉公の姿勢を感じます。今回はそんな門祖聖人の、加納に法華寺ができるもとになった現証弘通を学びます。

○ 加納の法華寺は現在の富田林市の西側、葛城山を背景とした南河内郡河南町にあります。同地のご弘通がはじまったのは、門祖聖人のお教化を受けた僧・真舜の、墓碑開眼の要請に応えたのが直接のきっかけとされますが、その素地には、門祖聖人が敬慕されていた大覚大僧正のご遺跡を訪ねる思いが強くあられたため、と考えられています。

○ 時期は、真舜の墓碑に刻まれた日付の永享四年、法華寺出土の古瓦の日付の永享五年、同寺所蔵の門祖聖人ご染筆の御本尊の日付の永享十一年が手がかりとなりますが、ほかに永享三年の説もあります。ちなみに、永享五年は如意王丸寄進の本能寺が建立された年で、沼津光長寺の日朝師が門祖聖人を訪ねてこられたのは永享七年です。

○ さて、加納のご奉公に向かわれた門祖聖人は、同地在住の母方の叔父にあたる斯波義盛と面会します。場所は土地の薬師堂と言いますから、義盛の生活は逼迫していたのかも知れません。見れば義盛が連れた三人の子の中で、末の男の子が重い眼病を患っていました。早速、門祖聖人は妙法の功德を説いて義盛一家を折伏し、お教化をするのです。一家が入信を決めると、門祖聖人は薬師堂を清めて妙法の御本尊をお祀りし、病氣平癒の祈願助行をされました。門祖聖人と共に一心にお看経をする義盛親子……。数刻後、子供の目は光を取り戻し、見事現証を顕して眼病は平癒するのです。この子供はのちに門祖聖人のお弟子となって日浄と名乗り、堺の顕本寺で活躍されます。また、この薬師堂は法華堂と改称され、のちに取要山法華寺となるのです。

○ この現証談はたちまち集落に伝わり、門祖聖人を訪ねて帰依する人が続出します。やがて村人から水不足の窮状を聞かれた門祖聖人は、人々と共に山に登って山腹の木の枝に御本尊を奉安し、一同に口唱の心得を諭して一座のお看経をされるのです。

○ お看経を終えた門祖聖人が柳の枝で山肌をつつくと、不思議なことにそこからコンコンと清水が湧き出しました。驚いた村人は揃って入信。湧き出た清水は簀に受けて各家庭へと流されたので水不足の不安は解消され、「簀のご霊水」と呼ばれて大切にされました。○ 現在の法華寺は門祖聖人当時と場所が変わっているようですが、簀のご霊水は今日も涸れずに湧いています。人の苦難を見れば、まず妙法の功德を諭して共に口唱する……。そんなご信心が現証を顕し、弘通の輪を拡げていくことを、今日に伝えるご霊水です。

「開導聖人御指南」

唯、目に見えたる経力にて弘まらせ給う時なるを、門祖曰、無智宗也、信心宗也、経力宗也、折伏宗也と。されば物識りは自力也。無智は信力也。時機相応也。(扇全十一巻二八九頁)

「開導聖人御教歌」

末法の弘教の筋は道ふたつ 現世安穩病氣平癒

File.17 西国弘通と題目講

南河内での弘通が開かれていた頃、門祖日隆聖人はお弟子の日暁師を派遣して牛窓の法華堂(岡山県瀬戸内市)再建にも着手されています。永享十年、門祖聖人満五十三歳のときでした。これより十年余の間は、かつて大覚大僧正が西国弘通をされた跡をたどり、その復興に力を注がれたご様子が窺えます。今回は、そんな門祖聖人のご奉公から学びます。

- 大覚大僧正は帝都を開教された日像菩薩の法灯を継承し、十余か寺を創建された弘通家です。しかし、この頃はそれから百年ほどが経過してその大半が衰退し、宗義も習い損じていたようです。そんなご遺跡を門祖聖人が復興していかれたのは、大覚大僧正が後醍醐天皇の第三皇子であったと伝わることから、門祖聖人のご実家の桃井家が与した「南朝の皇子を敬慕する思い」が強くあられたのではないかと考えられています。
- まず四年後の嘉吉二年、淡路島の妙勝寺、妙京寺の改宗が成ります。この二か寺はそれぞれ元真言宗と法相宗でしたが、大覚大僧正によって妙顕寺末の法華の寺となります。ただ、門祖聖人の時代には天台流の法門に変わっていたようです。後年、同地は多くの教学者を輩出し、それらは「淡路教学」と呼ばれますが、素地はこのとき作られました。
- 同じ頃、備前領主の石原但馬守道高が入信し、牛窓のご弘通が軌道に乗ります。本迹一致に染まっていた法華堂が八品門流に改宗したのは門祖聖人満六十四歳の宝徳元年。本蓮寺の寺号は門祖聖人満七十四歳のご巡教の際に授かっています。大名である石原家寄進の豪華な伽藍は、現在、国宝指定です。また、宝徳元年には備中高松(岡山市)にも本隆寺が建立されていますから、牛窓を拠点に周辺のご弘通もされていたのでしょうか。
- この宝徳元年には、やはり大覚大僧正に縁のある兵庫津(神戸市)の久遠寺が門祖聖人の門下に改宗しています。同時期に多方面で弘通の成果が現われたのは、尼崎や堺といった港町での弘通が進み、海運を利用されたためです。ただし、海路は瀬戸内といえども危険を伴いません。翌宝徳二年、牛窓から尼崎に戻る船は宇多津に漂着するのです。
- 宇多津(香川県宇多津町)は真言宗の強い土地でしたが、海が近くて井戸に海水が混じることを聞いた門祖聖人は、早速村人たちを折伏します。そして一本の桐の木に御本尊を奉安し、一座のお経を終えて村人に根元を掘らせると、見事清水が湧くのです。この現証がきっかけとなり、同地にはのちに本妙寺が建立されます。なお、このご霊水は、桐の木に鳳凰が住み着くようになったため「鳳凰水」と呼ばれて大切にされました。
- これら西国弘通の特色は、門弟を連れて縁を訪ね、教化ができるとお弟子を残して育成に当たらせて、後日適任の担当者を派遣する方法が取られ、また現地には有力信徒を核(講元)とした在家の題目講を組織されたことです。この、現地のご信者が日常修行を行なう組織づくりのために、京都や尼崎からお弟子を派遣した形態は、組(部)の教導に教務員が向く現在の佛立宗と同じです。しかもどの現場も現証談から出発しています。現証で教化し、まずは題目講で信徒の弘通組織を育てたのが門祖聖人のご弘通です。

〔開導聖人御指南〕

弘通とは信心の仕様を教えるなり。(扇全十七卷十六頁)

〔開導聖人御教歌〕

捨おかばおのれそだちにわるうなる 弟子も植木もせはしだいなり

File.18 信徒への教導(謗法払い)

各地で数々の現証を顕してご弘通された門祖日隆聖人。その秘訣は、真実の教えへと導く折伏や、口唱に徹するご信心にあったのはもちろんですが、見落とせないのが謗法払いです。色が浜の一村教化では村中の謗法物件を一斉にお焚き上げされたように、門祖聖人の謗法払いには徹底した厳しさがありません。今回は、そんなご信者へのご指導に学びます。

○ 門祖聖人がご信者を指導された様子を知る資料に『信心法度十三か条』があります。この法度は、門祖聖人が四十歳頃に用いられた九か条の像門法度を徐々に改良し、七十歳の頃に現在伝わる形になったと考えられています。原文は大半が仮名文字で記されますので、広くご信者全体に届くよう指導されたのでしょう。その変遷や内容を検討すれば、当時の世間一般の信仰状況や風俗をも感じとれる、非常に貴重な資料です。

○ まず他宗教への誠めとして、第一条では神社神道の神々への参拝および供養の禁止が、第二条では霊媒や呪術を生業とする者の祈祷を受けることの禁止が記されます。高祖は妙法口唱で十界聖衆となった神々と、巷の鎮守に宿る神々を区別されますが、神道は日本人の生活に深く結びつくため、日蓮門下では法華の守護神と位置付けて肯定するのが主流になっていました。門祖聖人はそれらを現証の妨げと否定されたのです。また、死者の口寄せや憑き物落とし、神のお告げを語る者たちの「祈祷の流行」に対しても、これらの根拠のない俗信は人々を迷わせ、ご利益を妨げることがを明快に教えています。

○ 同じ仏教の他宗派については、第三条で他宗の僧侶に法事を頼むことの禁止、第四条には他宗の法要への参詣の禁止が記されています。三条には「当宗の僧なくて事欠け候とも、他宗に何事もさすべからず」とありますから、まだ門下のお弟子の絶対数が少なく、ご苦勞されていた様子が分かります。しかし「諸宗無得道、墮地獄の根源」と仰せの高祖のお言葉を厳格に守ることが現証を顕す因である、と明確にご指導されるのです。

○ 日蓮門下であっても、第九条では他門流の寺院に参り、御本尊を拝んだり供養することを禁止し、また第十条では他門流の法事で御題目を唱えてはいけなさと記されて、高祖の御意に反する他門流は謗法と教えています。当時、洛中では御題目の信者は法華衆と呼ばれて同一視されていました。高祖の御意に反して思い思いの御題目を唱える他門流の謗法を、門祖聖人ははっきりと区別してご指導されています。これらは、俗縁の付き合いで葬儀等に参列する際の大事な心得と言えるでしょう。

○ 他の信仰の対象を安易に認める心は、妙法への純粹な信を濁らせませす。それが功德を得る妨げとなるので、妙法への帰依を誓う入信時はもちろん、世法のお付き合ひの中で出会う様々な信仰さえも、潔癖なまでに退けるご信心を門祖聖人は教えられたのです。

○ 開導聖人は、佛立信心の実質的な独立を目指して臨まれた高祖六百回御遠諱(明治十四年)の翌年、この法度を全組に拝読させています。更なるご信心の純化を期すために、時代を超えて必要とされる指針が、そこには記されているといただくべきでしょう。

〔開導聖人御指南〕

謗法払い、速やかならば利生現前。(十四卷二頁)

〔開導聖人御教歌〕

妙法をたもちながらも謗法の つみあるものに御利益はなし

File.19 信徒への教導(家庭での「信心」)

門祖日隆聖人の『信心法度十三か条』には、前号に紹介した他信仰への迷いの誠めと併せて、「近隣とのお付き合いの心得」や「家庭内のご信心の在り方」が記されています。少し厳しく感じるかも知れませんが、謗法のない清らかな日常生活こそが「現証を顕す条件」と、門祖聖人は重視されたのです。今回は「現証を顕すご信者の家庭」について学びます。

○『信心法度十三か条』の第五条は、「他宗の法事に行かねばならないことがあっても、そこでお茶の一杯の供養も受けてはならない。また、我が家で法事を営む場合は、他宗の人を招いてはならない」という誠めです。これは世法のお付き合いと言っても、ご信心が主体となる場では「謗者の供養は受けない」「謗者に供養しない」という節度を守って、法事そのものを純粹な功德行とするためです。仏事はご信心を練磨し、純化するために営まれます。「社交の場ではないぞ」と誠められています。

○第六条には、「他宗の功德風呂に添え木をしても、入ってはならない。また自分が功德風呂を立てた際に他宗の人を入れてはならない」とあります。お風呂を立てて有縁の人に汗を流してもらい、以って供養とする粹な習慣があったのでしよう。お風呂は水や燃料を多量に使いますので、その際、入れてもらう側は薪を持参したようです。門祖聖人は、この功德風呂に招かれた場合の心得として、礼儀として薪を持参するに止めよと教えています。ご近所や縁者とのお付き合いと、功德行とを区別されているのです。

○第七条も世法上のお付き合いに関する心得です。「謗法の信仰に関する寄付は一紙半銭も許されないが、政府からの要請の場合は別とする」とあります。庶民は弱く、朝廷や幕府の命に背けば要らぬ弾圧の種になった時代です。本来、謗法への寄進はご法度ですが、一般民衆がご弘通をするための配慮には、門祖聖人のやさしさを感じます。

○第八条は、「他宗の男性に娘を嫁がせたら必ず相手を教化せよ。他宗の女性を妻にしたら三年以内に教化せよ」とあります。また第十二条には、「信者の家に住む人は、婿や嫁はもちろん居候でも必ず教化せよ」とも記されます。お嫁さんの「三年の猶予」に現場をよく知る門祖聖人の温かいお人柄を感じますが、ともかく家庭内の不信者を放置せず、家中揃って同じご信心ができるよう最善の努力をせよとご指導されたのです。

○第十一条には、「借家の場合は他宗の棟札も許すが、自分の家によその棟札をあげることを禁ず」とあります。原文は「やがため」と記され、恐らく建築年や施行した棟梁の名を記す棟札に、家を守る他宗の護符を用いることを禁じ、妙法の上棟御本尊をお祀りするよう指導されたのでしよう。我が家から一切の謗法を払い、妙法に包まれた浄土とするので、家内一同が御法のお護りをいたたくと教えられたのです。

○最後の第十三条には、「謗法の振る舞いを互いに見隠し聞き隠しすれば、現在もご守護が得られず、来世は無間地獄に堕ちると知りなさい」と記されています。ご信者お互いが謗法の罪を得ぬよう、見て見ぬ振りをせず折伏に励め、と締めくくられるのです。

「開導聖人御指南」

家内に謗法人一人も無きを子孫栄福の相となす。大事の口伝。(十三卷一六八頁)

「開導聖人御教歌」

信行の功力によりて家も名も 相続するといふをしらずや

File 20 お弟子の教育と学校経営

人はどんなに丈夫でも寿命があります。と言うことは、末法万年の未来に備えるには、現在のご弘通と同時進行で次世代の弘通者を育てなければなりません。門祖日隆聖人が勸学院という学校経営をされてまでお弟子の養成に力を注がれたのは、ご自身のご信心を相続する未来の弘通者づくりを重視されたためです。今回はそんなお弟子の養成に学びます。

○ 門祖日隆聖人がいつ頃から若いお弟子を取られるようになったのかは不明です。ただ、門祖聖人の六老僧と呼ばれた主要なお弟子をはじめ、名の知られる方たちの大半は「幼少で入門」と記録されています。幼少は五く六歳から十歳頃でしょうか。ちなみに門祖聖人が『四帖抄』を著された満四十四歳のとき、六老僧の日信師と日登師は満七歳で日明師が五歳。『十三問答抄』を著された満五十歳のとき、日信師と日登師は満十三歳、日明師が十一歳、日禎師が五歳、後に入門の日与師が九歳に当たりますから、五十歳前後と考えられます。ちょうど尼崎の本興寺経営が軌道に乗り始めた時期のことです。

○ 『四帖抄』は門祖聖人の膨大な御聖教(御指南書)の最初期のものと考えられています。つまりこのことは、幼少の入門者の増加と共にご自身が学んできたことをテキストにまとめるご奉公に着手されたと見ることもできます。そして門祖聖人の執筆活動は、それからお弟子方の成長に合わせるように進んでいくのです。

○ これらのお弟子養成の舞台となったのが尼崎の本興寺でした。ここに「勸学院」という弟子教育の学校が設置された時期は不明ですが、門祖聖人満六十二歳の年の文献には「勸学院」の文字があり、それ以前よりの経営と考えられます。多くの少年を預かる学校経営のご苦労は、ご自身が額に汗して畑を耕し、学生に食べさせる食料を賄われたご様子が、門祖聖人のご本葬に詠まれた文書(三七日忌法則)に記されることで窺えます。

○ お弟子の日学師の筆による『三七日忌法則』は、大勢のお弟子や縁者が参集して営まれた門祖聖人の三七日忌の御宝前で詠まれたもので、それだけに門祖聖人のご生前を赤裸々に語る貴重な資料です。そこには遠方から出てきた学生を励まされ、勉強に励む姿を見ては喜ばれたことや、「若い学生たちが腹を空かせてないか」「法衣が粗末になっていないか」と常に衣食の心配されたご様子も記されています。

○ 当時はまだ珍しかったお茶を自ら点てられ、学生たちと夜が更けるまで法談されたり、寒い夜はお酒を温めて学生たちを労われることもあったようです。日学師は「実の父母の深い慈愛も、門祖聖人がお弟子を育てる心に及ばない」とお師匠の徳を讃えています。

○ 門祖聖人は満六十五歳で本能寺をお弟子に譲り、翌年には勸学院を拡張。更に翌年は本興寺もお弟子に譲って学校経営に専念されます。ご弘通を大事にされた門祖聖人が、そのご晩年のすべてをかけて「ご弘通の人づくり」をされたこと。そのご姿勢は、未来の弘通者たる学生を大切にし、親身に接していかれたことを、私たちは銘記すべきです。

〔開導聖人御指南〕

堅信の行者より堅信の子を生み出すこと、肝要なり。(八卷二二三頁)

〔開導聖人御教歌〕

上葉より下葉に露をゆづるなり 蓮花さくいけの夕かぜ

File.21 三千余帖の御聖教の執筆

門祖日隆聖人のお弟子養成への思い、更には末法万年の未来に向けて、正しい教えの相續を願うご信心は、「三千余帖」と言われる膨大な御指南を著わされたことでも窺えます。ご信心第一の弘通家として数々の実績を遺された門祖聖人が、一般には日蓮門下第一級の御学者としての評価を受けるのは、この質量共に抜きん出た御聖教の故でもあります。今回は、そんな門祖聖人の御聖教について学びます。

○ 門祖聖人のご著述による御指南書は「御聖教」と呼ばれます。聖教は「聖なる教え」「聖人の説く教え」の意味で、もとは釈尊の教えを指し、室町期には主に天台の教義書を「御聖教」と通称するのが流行したようです。門祖聖人は、高祖が明らかにされた天台の教えの深義を、日存、日道両師の御指南を通して正確に伝える意を以って、ご自身の著作を「本興寺流自作の諸聖教なり」と記されています。これが門祖聖人のご著作を指して「御聖教」と呼ばせていただくようになった起源と考えられています。

○ 古来「三千余帖」と呼ばれる「帖」は、和紙(美濃紙)四十八枚を一帖と数えたり、本を数える単位としても使われますが、教義を説かれるに当たって示された条目(タイトル)の「条」が転化したものと考えられています。門祖聖人の御聖教は、小さな疑問も解きほぐすかのように丁寧な条目が設定され、それぞれに解説が施されます。「三千」の語は、その条目が膨大なことを表現されたものですが、この一事でも、後進がより正確に教義を継承できるよう、心を尽くされたご様子を感じることができるとは思います。

○ 御聖教の内容は、天台三大部を経て高祖が明らかにされた「本門八品の御法門が仏教の真髄であること」を、存道両師の教えによって体系的に説くものです。ご執筆の時期は、四十五歳頃からの約三十年間とされ、時期的に存道両師のご遷化後、この重要な法門を後世に伝える決意をされたと考えられます。ご弘通ご奉公の暇を惜しみ、また現場の第一線を後進に譲って綴られた御聖教は、ご晩年のものには文字に震えさえ拝見できます。まさに門祖聖人の正法流布の願いが込められた御指南が三千余帖の御聖教なのです。

○ 御聖教は門祖聖人の当時より、一定の教義的素養を満たしたお弟子は自由に拝見できました。他門流や初学の者を制限したのは、教えの基礎を弁えないで重要教義を聞きかじり、習い損じるのを防ぐためです。しかし、故にその散失や焼失が増え、門祖聖人滅後二百年を経た本興寺二十八世日頭師が蒐集・修復して以降は、門外不出で厳重に管理されるようになります。ご真蹟の御聖教の大半が無事に今日に伝わる所以ですが、一方で門祖聖人の教えが広く門外に伝わることを拒む原因ともなりました。ちなみに日頭師の目録には三百六十三巻の御聖教が記載されています。

○ 近年は主要な御聖教が徐々に出版され、世間の学者の注目を集めますが、門祖聖人が「秘すべし」と仰せの御意を汲み、慎重に学び、正確に伝える姿勢が大事です。

〔開導聖人御指南〕

当佛立派のみ、年々歳々繁盛せり。門祖の御指南の御蔭なり。(十三卷一五八頁)

〔開導聖人御教歌〕

末法の外未来まで題目を 弘め貫く宗旨也けり

File.22 種子島の「弘通

門祖日隆聖人が尼崎の勸学院で育てられたお弟子方は、門祖聖人の滅後、その教えを各地に弘通します。門祖聖人の教育が、正しい宗義を以って信心を育て、弘通者を生み出すものであった故です。そんな勸学院育ちの第一級の弘通家を代表して、今回は命を賭して種子島、屋久島、永良島の三島完全教化の偉業を生んだ日典師のご弘通を学びます。

○ 種子島出身の日典師は、もと幼少で律宗の僧として得度し、林応と名乗っていました。長じて非凡な秀才を發揮した林応は、やがて種子島家の領主の信任を得、南都(奈良)に留学をします。律宗が国教であった地元の期待を一身に負っての遊学でした。

○ 七年に及ぶ修学を終え、堺の港で故郷に帰る船便の風待ちをしていたときのことです。按摩に呼んだ熱心な法華信者の太都に「戒律を教える貴族仏教は庶民の生活を救えない。末法は法華経本門の御題目に限る」と折伏され、これを縁に尼崎の門祖聖人を訪ねます。そして門祖聖人から上行所伝の妙法こそが仏法の奥義と学んだ林応は、律宗を捨てて門祖聖人のお弟子となり、日典の名を授かるのです。門祖聖人満六十六歳の年でした。

○ 日典師が門祖聖人のもとで過ごされたのは十年間です。種子島の俊才として遊学した日典師は、年齢も門祖聖人より十六歳年少と他のお弟子方より高く、学問や人徳が優れていたようです。後年は門祖聖人に代わって教鞭を取られ、勸学院の学頭も務めています。ただ、いつか故郷に上行所伝の妙法を伝えたいとの思いは強く、寛正二年、師への永の暇を請い、尼崎をあとにします。門祖聖人が満七十六歳を数えた最晩年の初夏でした。

○ 教え子の日良師に「帰国後一年を経て便りがなければ、種子島に来てご弘通して欲しい」と後事を託したのは、故郷の改宗の困難さを思い、死をも覚悟してのことでした。時に日良師は満三十歳の壮年で、勸学院の中でも信心堅固の逸材として知られていました。○ はたして帰郷後の日典師の御法門は、戒律の教えしか知らない島の人々を驚愕させます。そして律宗寺院の要職を占める領主一門の怒りを買い、「律国賊」の折伏に反発する民衆の憎悪は暴力と化して、日典師に降り注ぐのです。しかしもとより、これらの怨嫉、迫害は「如説修行者の証」と覚悟の上での帰郷でしたので、日典師は海岸に打ち上げられた海草を拾って飢えを凌ぎ、街辻に出ては下種の折伏を続けられるのです。

○ そんな中、日典師の御法門に耳を傾ける外護者が現れます。領主側近の山崎、徳永の両氏は、やがて領主の時氏公を密かに誘って聴聞に通うようになり、それぞれに妙法の信仰を得て改宗を決意するまでになります。しかし、このことを漏れ聞いた暴徒は「領主を誑かす悪人」と夜陰に紛れて日典師を襲い、海岸に埋めて石を積み上げるといふ暴挙に出ます。「石子詰め」と呼ばれる惨劇が起きたのは、寛正四年四月二十一日でした。

○ 種子島、および屋久島、永良島の三島は、日典師の志を継いだ日良師、日増師のご奉公で全島の教化を達成し、明治の廃仏毀釈まで一地域の完全妙法化を実現しています。

〔開導聖人御指南〕

願うても御法のためには、このたびの一生のこの身を、御法のために捨て奉るべきなり。

(十二卷一三頁)

〔開導聖人御教歌〕

今度はおもひさだめつのりのため しぬるいのちはひとつよりなし

File.23 『入滅』

門祖日隆聖人が一期の化導を終えられ、寂光本宮へとお還りになったのは寛正五年（一四六四）の二月二十五日でした。そのご臨終のご様子は、お弟子の日学師が『三七日忌法則』に詳しく記録され、開導聖人もその端座合掌の唱え死を信者の臨終の手本とせよと仰せです（扇全六巻七九頁）。今回はそんな門祖聖人の、ご入滅のお姿に学びます。

○ 門祖聖人がご病床に就かれたのは、寛正四年の十一月頃でした。人一倍ご健康でご奉公されていた門祖聖人が、現世の習いに従って臨滅の相を示されたのは突然だったようで、日学師の記述はこの十一月のご衰弱の様子から綴られています。即ち、食事を受け付けず、お好きな甘味にも興味を失われて、日ごとに痩せていかれるのです。『三七日忌法則』には「枝頭の蟬の露を呑むが如く、小水の魚の滴に栖むに似たり」と譬えています。ちなみに日典師が種子島で殉教されたのは、この年の四月でした。

○ 翌寛正五年の正月には小康を得られ、上洛して本能寺の御宝前にお別れをされています。このとき、門下一同に回達状を出されるのですが、そこには「私は本年中に臨終すると思う。あとのご弘通について申し渡したいことがあるので、面会に来なさい」と記されています。この手紙を見て一番に駆けつけたのが色ヶ浜本隆寺の義乗師で、それを喜ばれた書状が遺っています。ただし、この書状はお弟子の日与師が代筆し、門祖聖人は御花押（書き判）だけをしたためられています。すでにお筆が執れない状態でした。

○ わずかな希望を繋ぎ、ご病状の変化に一喜一憂されたであろう人々の思いを破り、やがて終焉のときは訪れます。それは長雨の続く二月二十五日の朝でした。死期を覚られた門祖聖人は、病床から起きて東側に祀られた御本尊の前に端座され、お数珠を広げて手を合わせ、御本尊をじつと見据えられます。驚いた給仕の小僧が気付け薬を含ませると、門祖聖人は目に怒りを表してそれを吐き、小僧の手を握って、最早延命の願いは愚かであると慈愛に満ちた目で諭されたと言います。

○ 姿勢を崩さず御本尊に向かわれていた門祖聖人は、集まったお弟子やご信者が静かに御題目を唱えて臨終の時を待たれる中、やがて皆の唱題に合わせて唇を動かされると、端座合掌のお姿のまま瞑想に入られるように寂光にお還りになります。聖寿八十歳でした。このとき、突如長雨を割って日の光が室内に射し、門祖聖人の尊容を照らします。それは釈尊が法華経を説かれる際に光を放ち、諸仏を召されたご様子を再現するかのような、尊い出来事であったと日学師は記しています。

○ 門祖聖人は「臨終の夕べには我が身は悪人なりと観念して偏に経力をたのみ、信心の宝乗に乗じて速やかに靈山浄土に詣で、三仏の顔貌を拝し奉るべきなり」（十三問答抄）と記されています。そのお言葉の通り、臨終に際してお姿は、お祖師さまが『如説修行抄』に仰せの唱え死でした。範を示して信者の覚悟を教えられたのです。

〔開導聖人御指南〕

臨終のときは唯口唱信力のみなり。（十四卷三六四頁）

〔開導聖人御教歌〕

唱へ死せんと思へばこの頃の　いとまある身ぞうれしかりける

File.24 門祖のお人柄と教え

門祖日隆聖人のご一代を二年にわたって学んできました。その締め括りとして、資料から滲み出るお人柄を考えてみたいと思います。ぜひ、私たちの目指すべき佛立菩薩像のお手本とし、一歩でも近づけるよう努力してこそ報恩ご奉公です。

- 門祖聖人の学徳は広く知られるところで、その類稀な知性は、三千余帖の御聖教や数々の法論の成果に存分に現われています。ところで門祖聖人は、この知性を師恩報謝の一筋に用いられました。門祖聖人の教えは、どこまでも高祖の教えの真髓を究める姿勢が貫かれています。膨大な御聖教は、ご晩年に至るまで日存、日道両上人の教えを守り、そして伝える角度を崩されません。門祖聖人のご弘通が、大覚大僧正のご弘通の跡を訪ね、その復興を遂げたとされることも含め、師恩を大切にされたお人柄が浮かびます。
- ご生前中の門祖聖人は、一宗の開祖としては意外と公的な身分(朝廷にいたたく僧階が低かったようです。御本尊を認める際にも僧階を記す署名はありません。僧階すら世俗の権威と嫌われていたのでしょう。京都の中心に本能寺という大寺を興しながら、公家に法華経を講じる等の華やかな参院講経は行われず、どうしてもと要請されるとお弟子を出講させています。名門の桃井家に生まれて権力の興亡の中に育たれた事情もあったでしょうが、なによりそんな、俗世間の権威を嫌う清廉なお人柄によると感じます。
- 世俗の権威を嫌われたご性格は、人々の暮らしの中の苦悩を敏感に感じ、気さくに手を差し伸べられた各地の現証弘通に發揮されました。そんな庶民性は、路上生活の貧者を見ては涙して自らの弁当を与え、ハンセン病の患者さんにも親しく接せられて、皆が心を許して門祖聖人を慕われたとの『三七日忌法則』の記述にも窺えます。門祖聖人のお葬儀には、謗者も含めて尼崎中の人々が集まり、合掌口唱の姿で見送られたとも伝わります。庶民の目線でご弘通をされ、多くの人々に慕われた宗教者像がそこにあります。
- 門祖聖人は旅を好まれ、軽装で山や海の景色を楽しみつつ各地のご弘通をされたといえます。謡曲がお好きで、壮大な景観を前にして自作の謡いを披露されることもよくあられたようで、色ヶ浜本隆寺にはそんなご自作の謡が伝わります。自然を愛するおおらかなお人柄を感じるエピソードです。
- そんな門祖聖人が遺された膨大な教えの中心を、開導聖人は『十三問答抄』の「十二宗名の御法門」と教えられました。これは、高祖が教えた法華経本門の御法門を、十二通りの角度で示されたもので、開導聖人は最後の御指南書『十巻抄』に至るまで、御指南の脇に十二宗名をしばしば注記され、強く意識するようご指導されています。また朝晩のお看経のときには十二宗名を強く意識し、その御意を外さないようご信心を伝えなさいとも教えられました。次回からは、その十二宗名の御法門を学びます。

「開導聖人御指南」

門祖曰、学文を好む者は信心無き者也と云々。当宗は十二の宗名に無智信心宗也と云々。

(十三巻五八頁)

「開導聖人御教歌」

日蓮はものしりでなし信者也 門祖も祖師の御弟子なりけり

File.25 十二宗名① 過去宗

門祖日隆聖人が説かれた十二宗名の第一は「過去宗」です。それは久遠本仏が最初に修行された「久遠」という遙かな過去に、私たちの御利益の因があると教えるものです。私たちの信心は、そんな久遠の教えを抛り所とする宗旨なのです。

○ 仏教にはさまざまな宗旨がありますが、概ね釈尊の教えを基点とします。中には中東の神を取り入れた阿弥陀仏の信仰や、七世紀頃にヒンズー教に対抗して生まれた大日如来の密教信仰、仏弟子の菩薩信仰などの亜流もあります。基本は紀元前五世紀頃にインドに実在した釈尊の教えで、そこから多くの仏教思想や修行法が生まれ、仏になる道を模索したのが、いわゆる各宗派の説く仏教です。しかしお祖師さまは、その釈尊ご自身が、法華経本門の御法門で遠い過去を明かされる点を重視されました。なぜなら、釈尊の最初のご修行の中にこそ、凡夫が仏になる鍵があるからです。

○ 法華経本門の御法門には、久遠と呼ばれる遠い昔に、釈尊が最初の菩薩行をされたことが明かされます。この久遠は、数千年や数万年といった人類の歴史より遙かに遠い過去で、お経文には「数字や思考の及ばない昔」（寿量品と記されています。その久遠のご修行のとき、仏になる大功德を得られたのが妙法の口唱修行です。そして、この妙法の功德を説かれたのが「妙法蓮華経」、つまり「法華経」の御法門だったのです。

○ 仏教は因果の法を絶対視します。仏になる因果関係も、その因の部分が明確になれば、自ずと結果としての仏の果報も手にできます。故に釈尊は、その「根本の因行」を明かされたのですが、私たち凡夫は過去世を知る術がありません。数世代前の過去さえ分からないのですから、久遠の因果となればなおさらです。そこで釈尊は、周到に方便（仮の教え）を積み重ね、凡夫の理解を助けますが、結果的にはほとんどの仏教者が久遠の御法門の重要性に気付かず、インドの釈尊の現実的な教えに固執してしまうのです。

○ この久遠の教えの重要性を指摘したのが中国の天台大師でした。天台大師は三種教相という三段階の判定法を以ってすべての仏教を比較し、その三段階目で「過去の成仏の因が唯一説かれる法華経本門が最も優れる」ことを論証しますが、やはり後進は理解できず、インドの釈尊が説く法華経を中心に仏典の解釈をし、日本にもそれが伝わります。

○ お祖師さまは「日蓮が法門は第三の法門なり」と仰せになっています。これは天台大師が指摘した、成仏の根源を明かす久遠の御法門に立脚した宗旨であるとの宣言です。それはインドで編纂された経典解釈の上の法華経信仰ではなく、久遠の釈尊が最初に唱えた妙法を、上行菩薩の手を経て譲り受け、そのまま現在に実践する信行で、そこに釈尊と同様に仏になる功德が得られることを、お祖師さまは教えられたのです。

○ 御題目を唱える多くの宗旨はこの大事を習い損じ、久遠の妙法を知りません。私たちは門祖聖人が「法華経を過去に置く」と仰せの久遠の妙法を口唱する宗旨なのです。

〔開導聖人御指南〕

法華経一部を過去久遠本因妙の所に置けば、南無妙法蓮華経の但五字のみ。これ第三下種の法門也。故に過去宗也。（十六卷二二頁）

〔開導聖人御教歌〕

釈尊の凡夫でまししその昔 娑婆の修行は南無妙法蓮華経

File.26 十二宗名② 下種宗

門祖日隆聖人が説かれた十二宗名の第二は「下種宗」です。下種は種を下すことですが、因果を大事にする仏教は、成仏という果実を得るには「正しく仏になる種」がなにより大切です。私たちのご信心は、そんな「仏の種」を得るための宗旨なのです。

○ 仏教にはさまざまな教えがありますが、天台大師は内容を大別すると「下種益」「熟益」「脱益」の三益に分かれると教えています。下種益は仏になる種を得る御利益。熟益はその種を育てる御利益、そして脱益は成仏という花を咲かせる御利益です。紀元前五世紀頃にインドに実在した釈尊の教えで、そこから多くの仏教思想や修行法が生まれ、仏になる道を模索したのが、いわゆる各宗派の説く仏教です。しかしお祖師さまは、その釈尊ご自身が、法華経本門の御法門で遠い過去を明かされる点を重視されました。なぜなら、釈尊の最初のご修行の中にこそ、凡夫が仏になる鍵があるからです。

○ 法華経本門の御法門には、久遠と呼ばれる遠い昔に、釈尊が最初の菩薩行をされたことが明かされます。この久遠は、数千年や数万年といった人類の歴史より遙かに遠い過去で、お経文には「数字や思考の及ばない昔」（寿量品と記されています。その久遠のご修行のとき、仏になる大功德を得られたのが妙法の口唱修行です。そして、この妙法の功德を説かれたのが「妙法蓮華経」、つまり「法華経」の御法門だったのです。

○ 仏教は因果の法を絶対視します。仏になる因果関係も、その因の部分が明確になれば、自ずと結果としての仏の果報も手にできます。故に釈尊は、その「根本の因行」を明かされたのですが、私たち凡夫は過去世を知る術がありません。数世代前の過去さえ分からないのですから、久遠の因果となればなおさらです。そこで釈尊は、周到に方便（仮の教え）を積み重ね、凡夫の理解を助けますが、結果的にはほとんどの仏教者が久遠の御法門の重要性に気付かず、インドの釈尊の現実的な教えに固執してしまうのです。

○ この久遠の教えの重要性を指摘したのが中国の天台大師でした。天台大師は三種教相という三段階の判定法を以ってすべての仏教を比較し、その三段階目で「過去の成仏の因が唯一説かれる法華経本門が最も優れる」ことを論証しますが、やはり後進は理解できず、インドの釈尊が説く法華経を中心に仏典の解釈をし、日本にもそれが伝わります。

○ お祖師さまは「日蓮が法門は第三の法門なり」と仰せになっています。これは天台大師が指摘した、成仏の根源を明かす久遠の御法門に立脚した宗旨であるとの宣言です。それはインドで編纂された経典解釈の上の法華経信仰ではなく、久遠の釈尊が最初に唱えた妙法を、上行菩薩の手を経て譲り受け、そのまま現在に実践する信行で、そこに釈尊と同様に仏になる功德が得られることを、お祖師さまは教えられたのです。

○ 御題目を唱える多くの宗旨はこの大事を習い損じ、久遠の妙法を知りません。私たちは門祖聖人が「法華経を過去に置く」と仰せの久遠の妙法を口唱する宗旨なのです。

〔開導聖人御指南〕

法華経一部を過去久遠本因妙の所に置けば、南無妙法蓮華経の但五字のみ。これ第三下種の法門也。故に過去宗也。（十六卷二二頁）

〔開導聖人御教歌〕

釈尊の凡夫でまししその昔 娑婆の修行は南無妙法蓮華経

File.27 十二宗名③ 本門経王宗

門祖日隆聖人が説かれた十二宗名の第三は「本門経王宗」です。「仏教経典はすべて仏が説かれたものだから、等しく有難い」と考える人がありますが、経典にも内容の浅深があり、なにより「格の違い」があります。そんな中で、私たちは最高位の格にある「法華経本門の教え」を学んでいることを、この宗名は教えています。

○ 本門経王宗の「本門」は、法華経の後半部分の本門に説かれる、久遠本仏が末法の凡夫救済のために、上行菩薩に手渡された妙法のことです。この妙法は、過去宗で学んだように、久遠本仏がご修行の最初に口に唱えられた御題目で、それは下種宗で学んだように、成仏の御利益を手にする起点となる功德があります。法華経の御法門は、この久遠の妙法を示すために、そしてそれを末法の凡夫に唱えさせるために説かれています。このことを教えたのが「本門」という言葉で、経典の部分を指しているではありません。

○ その法華経本門の妙法を「経王」と言うは、仏のすべての御法門を生み出す王者の位にあるという意味です。この言葉は、久遠本仏ご自身が「諸経の中の王なり」（薬王菩薩本事品）と仰せのお経文に由来しますが、ほかにも過去、現在、未来に説く無量の説法の中で「法華が最も第一である」（法師品）等と、法華経では一貫して「久遠の妙法」を説く法華経を、一切の経典の最上位とすることが示されています。

○ 民主主義の現代では、王位と言われてもピンとこないかも知れません。国民の象徴的な王様や、軍事や経済で支配する権力者をイメージする人もあるでしょう。しかしお祖師さまは、「天人地の三をつらぬくを王と名づく」（諫曉八幡抄）と仰せで、天地自然とそこに住む人々を治めるのが王者であると教えています。法華経に「今この世界は皆私の治めるところで、その中の衆生はすべて吾が子である。人々の苦悩は多々あるが、私人のみよくそれを救い、護るであろう」（譬喩品）と仰せのお言葉は、まさに私たちの住む娑婆世界の王としての、み仏のお立場と責任、お慈悲の深さを感じます。

○ お祖師さまはこの「王」に、大王と小王の区別があることも教えています（内房女房御返事）。中央の天子と地方の領主の違いで、仏法に譬えるなら「下種の妙法」が説かれる法華経は大王、その他の経典は小王に当るといいます。小王は大王の命を受けて地方を治めねばなりません。下種の妙法を手にする信心を得るために、方便（仮の教え）として信心増進の役割を担う諸経は「臣下の位」にあるということです。

○ 門祖聖人は、「一代諸経の中に、法華経の本門を以って第一の経王となす」（本門弘経抄）と仰せになり、「本門の中にも本門八品上行要付を以って釈尊出世の本懐となす」（同）と記されて、上行所伝の御題目こそが一切の仏法の頂上に君臨する「王者の法」であると教えられました。佛立信心は、そんな最高最尊の法に基づいて、日々の信行を学ぶ宗旨なのです。

〔開導聖人御指南〕

諸経中王最為第一の妙法蓮華経の甚深の奥蔵たる南無妙法蓮華経は、諸の薬の中の第一の良薬たること、宗祖の御指南、如来の金言也。（十二卷三八〇頁）

〔開導聖人御教歌〕

法華経は諸経の主君題目は 御たましひにましましにけり

File.28 十二宗名④ 事相宗

門祖日隆聖人が説かれた十二宗名の第四は「事相宗」です。事相は姿や形に表れたご信心のことで、心の状態は未熟でも、実際に口唱をしたりご奉公に参加して功德を積むのが法華経本門の教えです。理屈より実践を尊む宗旨であることを、この宗名は教えています。

○ 私たちが功德や罪障を積む行為を、仏教では身口意の三つに分けて教えます。この中で、心の働き(意業)は周囲の人の目では確認できないので「無相行」と呼ぶのに対し、口(口業)や身体(身業)で行う、誰の目にも映る修行を「事相行」と言います。

○ 仏教は「智慧の宗教」とも言われるように、仏の正しい智慧の世界に到達するのが大きな目的です。そのために瞑想し、自身の心の中に悟りを見出すのが無相行ですが、これは非常に高度な難しい修行でもあります。一方、煩惱を滅して功德を積むために、身体で参詣やご奉公に励み、また口で御題目を唱えたりご信心を勧める事相行は、その気になれば誰もができる修行です。ですから煩惱の盛んな末法の凡夫は、無相行より事相行、事相行の中では口の修行を最も優先すべきと教えているのです。

○ では、優れたご信者は心の修行のみすれば良いのかというと、実はそうではありません。なにごとく「理論と実践」は車の両輪に譬えて大切にします。この理論に当るのが無相行、実践が事相行ですが、世間のことは「理論に基づく実践」と理屈の比重が重くなりがちなのに対して、ご信心は事相が中心です。なぜなら、仏さまの最初のご修行(事相)を説明するために、すべての法理や教えは生れているからです。

○ 仏教経典は様々な教え(理)を説いて、衆生を仏の智慧の世界へと導きます。その法理の最高峰が法華経の前半(迹門)に説かれる諸法実相の御法門です。聴聞の衆生は、それを聴いて仏の智慧の世界に入ることができるのですが、後半の本門の御法門では久遠本仏(根本の仏さま)の最初のご修行の様子が明かされ、それが釈尊の化導の帰着点になります。それは妙法を「我も唱え、他にも勧める」事相行でした。つまり釈尊の崇高な教え(法理)は、この久遠の事相行に人々を導くために展開されたので、理を究める無相行は久遠の事相行に至る過程に過ぎません。私たちの信行は、この久遠の事相行をお手本として学ぶもので、ほんとうは「愚かなので口唱で良い」というのではないのです。

○ そこでお祖師さまは、「心がどんな状態でも口に妙法を唱えよ」と示され、開導聖人は「御本尊が生きておられると分からなくても、生きていらつしやるつもりでお給仕なさい」と教えられました。心が伴わずとも、姿や形に示して口や身体で功德を積み上げ、その功德が心も整え、やがて正しいご信心を育てていく……、これが事相行です。

○ ですから佛立信心は、ともかく実践を重視します。口唱や参詣、お教化や各種のご奉公は、分かっているからするのではなく、実践の中でご信心を学ぶのです。頭の中で解るだけで済まらず、できるご奉公をどんどん実践する信者を育てるのが、事相宗のご信心です。

〔開導聖人御指南〕

口唱は声に顕るるをいう。事相也。観念にはあらず。つとむるも参詣も事相也。折伏も面折也(中略)事相、所作に顕れたる信行をいう。御弘通は事相にあらずば叶い難し(玉函卷五三頁)。

〔開導聖人御教歌〕

本門は事相宗也事相とは めに見えたるを事相とぞいふ

File.29 十二宗名⑤ 無智宗

門祖日隆聖人が説かれた十二宗名の第五は「無智宗」です。ここで言う無智は、「仏の智慧をいただくために、凡夫の知恵を捨てる」という意味で、これは久遠本仏(根本の仏さま)の過去久遠のご修行の大きなポイントです。この、久遠本仏の本因妙行を修めるために、我が知恵を捨てて「素直になる稽古に励む」宗旨であることを、この宗名は教えています。

○ 私たちが生活する上で、知恵を磨くのは大事なことです。安心を手にし、より快適な人生を歩むには、優れた知恵が大きな役割を果たすからです。今日の人類の繁栄も、先人の努力によって積み上げられた知恵の所産であるのは言うまでもありません。ただ、仏の覚られた智慧は、そんな人間の知恵とは次元が違々と仏教は教えています。

○ 仏の智慧は、天地自然の理を悟り、人々の心の罪を滅して功德化させる清浄なものです。対する私たち人間の知恵は我欲煩惱を起点とし、基本的には自己の繁栄を目指します。他のために財産を施す篤志家も、お金が尽きれば「出来ない」と考えます。自身の体調が最悪では、他人の荷物も持てません。つまり「ゆとり」がないと、最後は自分を守るようにしか働かないのが人間の知恵で、ここに仏の智慧に及ばない原因があるのです。

○ この「仏の智慧」と「凡夫の知恵」の次元の違いを、私たちは現証の御利益で知ることができます。御題目の口唱で得る御利益は、時に人類の英知では説明できない妙不可思議な結果を顕すからです。

○ そんな仏の智慧を得るには、凡夫の知恵を捨てよと法華経の御法門は教えます。それはちやうど、コップに清水を注ぐには、まずコップを空にできれいに洗うようなものです。いくらきれいな水を注いでも、コップの中に泥が残っていると、清水はコップの中で泥水になります。仏の智慧も、心に我欲を残していただけば、自己流の勝手なご信心に変質し、妙不可思議な御利益を顕すことにつながらないのです。

○ そこで久遠本仏は、私たち凡夫が仏の智慧の包まれた妙法の功德を得るために、本門八品の御法門を説かれる中で、不軽菩薩のご修行を示して無智に徹するご信心を教えられました。不軽菩薩のお話は、久遠本仏の最初のご修行を具体的に説かれたもので、お祖師さまが常に「不軽菩薩を手本とせよ」と教えられた大事な教えです。そこには、「この無智な行者よ」と誹謗され、暴力を加えられても怯まず、合掌礼拝の敬いの姿で人々に妙法を勧めた「愚直なご信心」が説かれています。これを現在に受け継ぐのが法華経本門の行者、まことの佛立信者であると、お祖師さまは教えられたのです。

○ ですから佛立信心では、我が思惑を捨てて素直に教えをいただく、素直正直なご信心を尊びます。御法門の聴聞に励み、教わった教えのままに改良に努めるのは「素直正直の稽古」です。御法のため、宗門のため、お寺の発展のためと一致協力してご奉公に臨む異体同心を学ぶのも同じ。どうしても我が出て素直になれないときは、口唱に励んで我を去ります。そんな無智に徹する素直なご信者が、仏の大いなる智慧を手にするのです。

〔開導聖人御指南〕

おのが知恵と知恵は知恵にあらず。凡夫の妄想なり。故に私を捨てて、仏の智妙を信ずるを、まことの智者と申すなり。(十四卷三〇頁)

〔開導聖人御教歌〕

無智なるぞよしといふ也みほとけの 教へのままを仰ぐ物故

File.30 十二宗名⑥ 信心宗

門祖日隆聖人が説かれた十二宗名の六番目は「信心宗」です。仏教は仏の智慧を得ることを目指す宗教ですが、法華経ではその決め手を「信心」と教えました。故に信心を磨き、それを極め、法華経に説かれる真の信心を手にすることは、佛立信心の要となります。常に信心第一の生活を実現する宗旨であることを、この宗名は教えています。

○ 仏教には様々な教えや修行がありますが、それらが求めるものは心の昇華で、具体的には信心を得ることです。これは、仏の最初の御法門の華嚴経にも「信はこれ道の源、功德の母」と説かれるように、教えの浅深や聞き手の能力を問わず一貫したものです。その信心とは「マコトの心」、すなわち衆生の心に潜む仏心を指しています。

○ この「信心の重要性」を最も強調されたのが、仏の真実経、法華経の御法門でした。法華経では終始「信心の大事」が説かれます。まず前半では、仏弟子中で知恵第一と称された舍利弗尊者が、最初に仏の真意を理解して自身の知恵を捨て、「私は信をもって仏の智慧の世界に入れた」と告白します。最高の知恵者でさえ、我が知恵を捨てて信を取る展開は、仏道修行の核心が、そんな思い切りにあることを明確に示唆しています。

○ 法華経の中心となる本門の御法門に入ると、この「信」の正体が具体的に示されていきません。それは「一念信解」「初随喜」と表現される、ただ妙法を有難いと無垢に喜ぶ心と説かれるのです。そして、仏はこの随喜心に満ちた「信」を他の人に伝える功德は絶大であると仰せになります、その実践こそが仏に成る根本の修行であると示されるのです。

○ ところでこの法華経本門に示された「信」を、お祖師さまは「一向に(ひたすらに)上行所伝の御題目を口唱する姿が一念信解、初随喜の心である」と教えられました。つまり信とは、単純に個々の心の状態を言うのではなく、心に満ちた随喜心が口唱となり、喜びあふれて「南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経…」と一心にお看経ができる姿、しかもその口唱の喜びをどんどん他の人にも勧めるご信者の姿の中にあるのです。

○ 天台大師は「疑いなきを信という」と仰せです。ですから、一向に唱える口唱の中には、御法を信じて疑わない「決定心」が必要です。また開導聖人は「信と任とは同意なり」と御指南されていますから、自分の思いを挟まず、すべてを御法にお任せする覚悟で口唱に励むのも大切な心得です。また開導聖人は「信は正直」とも仰せです。お看経ができることを単純に喜び、機会があればグズグズ言わずにサツと口唱のできる信者を目指せば、そこに信心宗のご信心が養われるのです。

○ 法華経が、そんなご信心の大事を教えるのは、心の中を随喜心でいっぱいにして少しの我見や疑いも残さず、一心に妙法を唱えることで、妙法に包まれる仏の智慧を、そのまま我が身に譲り受けるからです。つまり、喜びあふれる口唱の姿は、そのまま我が身が妙法の功德を得、現証を顕し、未来は浄土参拝を確かにする法華経本門のご信心です。しかもその「随喜口唱の信心」が顕す現証は、他の人のご信心を起こし、自身の菩薩行をも完成させます。お祖師さまが「信の一字を詮と為す」と仰せの所以です。

〔開導聖人御指南〕

この御法は信心が所詮なり。信心にて弘まる御宗旨なり。(十一巻一九八頁)

〔開導聖人御教歌〕

唱ふるが信心なればとなへずに ありがたがるは信心でなし

File.31 十二宗名⑦ 易行宗

門祖日隆聖人が説かれた十二宗名の七番目は「易行宗」です。易行は難行、すなわち難しい修行に対する言葉で、やさしく、誰もが取り組める修行を指します。法華経本門のご信心は、最も勝れた妙法の功德をいただく故に、凡夫の誰もが仏果を得ることができません。絶大な功德を得る教えは、そんな修行の形にも表れることを、この宗名は教えています。

○ 私たちは普通、自分に出来ないことを成し遂げる人、難関を克服し、より高度な知識や技術を手にした人を賞賛し、尊敬します。それは個人の能力や努力だけでなく、恵まれた環境の賜物であることも多いのですが、それを嫉むよりは讃える方が人間的には素直でしょう。ところで仏教界の先駆者たちも、そんな人間の心に従い、より高度で難しいことに挑戦する人々が主流となりました。仏の偉大な智慧を手にするために、それを成し遂げた行者が尊敬を集め、聖者と称えられる空気が各教団に定着をしていくのです。○ 難度の高い学問的知識や厳しい修行は、いつしか仏教のイメージとなりました。ただ、学問をするには時間が要ります。複雑な戒律を守る日常を過ごすには生活を切り捨てなければなりません。毎日山野を踏破したり、厳寒に水を被るような荒行には健康で強靱な肉体が必要です。必然、家族を支えるために働く人や、病弱に生れた人などは、仏道を究める道が閉ざされることとなります。果たしてそれは、仏のご本意でしょうか。

○ そもそもインドにご出現された釈尊のご教導は、そんな特殊な条件を満たす行者だけに許された、難行や苦行を否定することからスタートしました。王子の身分を捨てて王城を出た釈尊は、当時も主流だった苦行を六年間やって見せ、その無意味さを証明されます。そして正しい法によつてのみ、仏の智慧が得られることを順々に説いていられるのです。仏教者でありながら難行苦行を尊ぶのは、基本的な誤りを犯していると言えます。○ なぜ、そんな基本的な間違いが横行したのかというと、人間は難しいものを尊ぶ反面、簡単なものを軽視する癖があるためです。しかし、例えば文明の利器は進化するほどより手軽になり、簡単な操作で多くの人の生活を豊かにします。パソコンなどはその代表格と言えるでしょう。仏教も理屈は同じで、功德の深い法が説かれるごとに、より多くの人が救われました。その頂点が最後に方便(仮の教え)を廃して示された法華経本門の教えです。ここに説かれる上行所伝の妙法は、一切衆生の成仏を可能にしたのです。

○ お祖師さまは「上行所伝の妙法には、久遠本仏のご修行の功德と、仏と成られて永く衆生を救済してこられた功德のすべてが包まれている」と仰せになり、「信心口唱でこの御題目をお持ちすれば、私たちはそんな久遠本仏の一切の功德を自然に譲り受けることができる」と教えられました。妙法の功德が絶大な故に、罪障の深い凡夫が日常生活を送りつつ、誰もができる口唱行で仏果を得られる……、つまりこの易行で御利益を顕す修行こそが、真実の大法を得た証明でもあるのです。

○ 難しい修行で得意になるのは、教えが未熟な証拠です。誰もが、どこでも出来る口唱信心に誇りを持ち、怠らず、真剣に、お看経に励むのが佛立信心なのです。

〔開導聖人御指南〕

但信唱のみにて現当二世を成就する。易修易行。これより外にあることなし。(七卷二七頁)

〔開導聖人御教歌〕

妙法は易修易行也怠らず 口唱するのを持つとぞいふ

File.32 十二宗名⑧ 経力宗

門祖日隆聖人が説かれた十二宗名の八番目は「経力宗」です。経力は御題目に備わる力のことですが、そこには「久遠本仏のご修行の功德」と、仏と成られて「無辺の衆生を救済される功德」の一切が納まると、お祖師さまは仰せです。私たちは口唱信行によって経力を得、その現証の御利益で、ご弘通をする宗旨であることを、この宗名は教えています。

○ 仏道修行の究極は「菩薩行」と言つて、自身のことよりも、他の人の幸福のために心や身体が使える人になることです。これは慈悲の心から出る最高の功德行ですが、実際に人を助けるには相応の「力」が必要になります。そこで古来、菩薩方は長い時間をかけて自らの持つ力を鍛え、様々な神通力を身に付けて、菩薩としての活動を行いました。

○ ところで、人間の持つ知力や体力、経済力等といった力は、鍛えても限界があります。特に仏教では、私たちの様々な苦悩は、実は過去世から積み重ねた罪障にその原因があると教えますから、どんなに勝れた人も、自分の力を高めるだけでは根本的な苦悩の解決ができません。人の力で一時的に助けられた人の多くが、しばらくすると再び同じ苦に悩みがちなのもそのためです。現実の苦悩の根っこ見ずに、真の解決はないのです。

○ そこで仏は、長い時間をかけた厳しい修行に耐えられない末法の凡夫が、尊い菩薩行を実践するために、法華経本門に妙法の力を得る道を示されました。上行菩薩に託された、「仏が具えるすべての功德」を包む御題目の口唱信行がそれです。この御題目には煩惱の病を治し、過去世からの罪障を消滅する「力」があります。ですから私たちは御題目を正しく持ち、一心に口唱行に励むことで妙法に具わる力を譲り受け、妙不可思議な現証御利益を顕して、さまざまな苦悩を根本から解決することが出来るのです。

○ この現証の御利益は、真理の法を完全に覚られた久遠本仏の力(仏力)が、そっくり包まれた上行所伝の妙法(経力)を得、その力を顕す正しい信行(信力)を身に行うときに顕れます。これを三力和合と言います。私たちはすでに、お祖師さまや門祖聖人、開導聖人のお陰でこの三つの条件を整えています。決め手はご信心を磨くこと。即ち口唱信行に励み、仏力、経力を顕す私たち自身の「信力」を高める努力が最後の鍵となるのです。

○ 御題目の経力は、凡夫の身近な苦悩を解決するばかりではありません。その現証で妙法の功德の素晴らしさを凡夫に知らしめ、罪障の深い私たちの信心を覚醒して、新たな菩薩を誕生させる絶大な力を具えます。佛立信心が自分の考えや力を頼んで苦悩の解決を図ることを最も嫌い、御宝前を第一として経力を顕すことを常に教える所以です。

○ 宗門は今、「佛立菩薩を育てる運動」というスローガンで、ご奉公を進めています。この「佛立菩薩」という言葉ですが、慈悲の心で人助けに励む仏道修行者の中で、「ふつうの菩薩」は自らの力(自力)を磨いて神通力などで人助けをするのに対し、「佛立菩薩」はご信心を磨き、御題目の力(経力)で人助けのご奉公をすることを指します。口唱信行で顕す現証によって他の人の苦悩を救い、ご弘通するのが経力宗の佛立信者なのです。

〔開導聖人御指南〕

経力宗なれば経力にて人を助くる宗旨也。(中略)謗法私を速やかにさせて、転檀入講した上にて御題目一方にて祈り奉れば、祈りの叶わぬという事、あるべからず。(十三卷三九二頁)

〔開導聖人御教歌〕

ありがたやみのりのちからなればこそ わがごときすら人をたすくれ

File.33 十二宗名⑨ 口唱宗

門祖日隆聖人が説かれた十二宗名の九番目は「口唱宗」です。本門佛立宗の修行は、御題目を口に唱える「口唱行」が中心ですが、それは誰もが日常生活の中でできる修行でありながら、すべての仏教教理の帰着点で、私たちが学ぶ一切の修行ご奉公も口唱行の完成に向かっていきます。この宗名は、そんな法華経本門の修行の要諦を教えています。

○法華経本門の御法門には、久遠本仏(根本の仏)が過去久遠のご自身最初の菩薩行を明かされます。それは、凡夫が菩薩となり、仏となる決め手で、それが示されたのは末法の未下種の凡夫が手本とするためです。法華経は更に、その具体的な様子を不軽菩薩の故事をもって説き、久遠の菩薩である上行菩薩に託して末法の私たちへと届けます。この久遠の菩薩行を末法で体現されたのが高祖日蓮大士です。つまり、お祖師さまの教えられた妙法の口唱修行は、実は仏教の根源である久遠の菩薩行そのものです。門祖日隆聖人が「久遠の釈尊と上行菩薩、そして不軽菩薩と日蓮大士は一つ」と仰せの所以です。

○ですから佛立信心は、口唱行の完成を目的とします。御法門を聴聞するのは知識を増やすためではなく、口唱の信心を磨くためです。さまざまにご奉公を覚えるのも物識り達者になるためではなく、罪障消滅に努めて口唱の力を顕すためです。つまりご信者はベテランになるほど、より良い口唱が出来て御利益が顕せるようにならねばなりません。

○ところが長くご信心をする人の中にも、口唱の嫌いな人がいます。ご信心の理屈はよく知っていても、口唱を軽視してあまりしない人もいます。御題目を唱えるだけの簡単な修行なのに、なかなか声が出ない人、唱えてもすぐに気が逸れて長い時間は続かない人もいます。これでは最も大切な「決め手」を欠きますから、「口唱ぐらいは誰でも出来る」と油断せず、身に付くまで丁寧に教えてあげることが大切です。

○開導聖人は御教歌や御指南の中で、正しい口唱の心得をいろいろ示されています。口唱の時間は「千遍よりも万遍」と教えますから、「一遍でも多く」が基本です。時間の目安はお供えしたお線香一本ですが、最初は五分、十分、三十分(約千遍)と目標を決め、少しずつ多く唱えられるようになります。また、朝晩の口唱は「忙しくてもやめるな」と仰せですので、一日の始まりと終わりに口唱する習慣を持つことも大事です。「声も惜しまず」とも教えます。自分の一番いい声、全身で絞り出す精一杯の声を出し惜しみせず、全力で口唱に集中するのです。御本尊の御題目をしっかりと見つけて声に出し、その声を耳で聞いて心に納めよとも記されます。また「飲んで唱えよ」とも教えています。

○二十四世講有日誠上人は「よいお看経」を繰り返してご指導されました。それは教えを分かりやすくまとめ、「御本尊をみつめ」「ご弘通を第一に祈り」「一遍でも多く」「姿勢を正し」「大きな声ではつきりと上行所伝の御題目をお唱えすること」と教えられたものです。口唱の際に一つずつ確認しながら唱えれば、正しい口唱が身に付きます。そしてそれが、久遠の菩薩行を末法で実践して妙法の現証を顕す、佛立菩薩の姿なのです。

「開導聖人御指南」

この口唱の中より家内安全、息災延命、浄土参拝の御利益は出るものなり。故に口唱を第一の宝として行住坐臥に南〇経と唱え唱えて積功累徳を樂しむべきなり。(十一卷二〇七頁)

「開導聖人御教歌」

となれば千々のねがひもかなふなり みのりのこゑぞたからなりける

File.34 十二宗名⑩ 名字即宗

門祖日隆聖人が説かれた十二宗名の十番目は「名字即宗」です。

なに「分相応」というのは大事で、自身の力量を知らずに無理をして、高度な課題に挑戦しても、徒労に終わることはありがちです。ですからお祖師さまは「末法の行者の位」を自覚した修行を指導されました。この宗名は、末法の私たち凡夫の位を名字即と押さえ、名字即相応の口唱修行に徹するのが法華経本門の修行であると教えています。

○ 初心者がいきなり上級者用のコースに挑んでも、ついていくのは困難です。上級者が初心者用のコースに留まれば力を伸ばすことが出来ません。仏教に様々な角度の教えがあるのは、いろんな段階に応じて御法門が説かれるためですが、肝心の学ぶ側が自分の力を見誤っては教えが活きません。そこで中国の天台大師は、自身のご信心の状態を知るために「六即」を示し、それぞれに最も相応しい功德行があることを教えたのです。

○ 「六即」は六段階のご信心の「位」で、理即、名字即、觀行即、相似即、分真即、究竟即と次第します。「理即」は理屈の上では仏になる素養を持ちながら、まだご信心がでない世間の人々。「名字即」は初めて仏法に値ってご信心を起こした人で、「觀行即」はご信心が少し進んで、心で仏の教えが理解できる段階を指します。「相似即」は仏の悟りに近づいた人、「分真即」は仏の悟りの一部を得た人で、完全に悟りを会得した段階を「究竟即」といいます。「名字即宗」の名は、この六即に由来しています。

○ お祖師さまは、この六段階の行者の位のうち、末法に生れた私たちは総じて名字即であると教えられました。もちろん長くご信心をして、ご信心の筋道をほぼ理解した人も含めて、です。なによりお祖師さまご自身が「日蓮は名字の凡夫なり(顕仏未来記)」と仰せですので、私たちがその上をいく道理はありません。そこで少々ご信心が分かっても慢心を誡め、まずは名字即の位と自覚することから本門佛立宗の信仰ははじまります。

○ 名字即の「名字」は久遠本仏が覚られた妙法の名で、具体的には上行所伝の御題目のことです。「即」は、その御題目によって仏果を得るという意味ですから、自分の力(自力)を捨てて御題目の力(経力)を信じ、「我も唱え、他にも勧める」御題目の口唱修行によって現証御利益を顕し、寂光浄土への参拝を指すのが名字信位の信者です。ですから、觀行即の行者のように心で分かったつもりになったり、分真即の賢者のように少し悟りを得たと誇れば仏法を誤ります。末法の凡夫はどこまでも口唱に励み、経力に縋る以外に仏果を得る道はないと知るのが、お祖師さまの教える法華経本門のご信心なのです。ただし、名字即の信位に徹せよと教えるのは、未熟な初心者向けというわけではありません。仏教の根源である久遠の菩薩行は、名字即の信心成仏を説かれていますし、お祖師さまは高位の菩薩の成仏も、名字即の初心に戻って果たされると教えます。そこで門祖聖人は「六の故に題目信心増進、即の故に初後唯一題目」と御指南され、慢心を誡めるために六段階があるが、初心も達者も成仏は名字即の口唱に限ると教えられたのです。

〔開導聖人御指南〕

名字即は信の一字なり。開會觀心するに堪えず。名字即の信者に開觀を説かば謗法なり。

また広学多聞は制止すべし。唯無味口唱の信の一字なり。(十四卷一六三頁)

〔開導聖人御教歌〕

妙法の御利益を見て経力を 信ずる位名字即也

File.35 十二宗名⑪ 教弥実位弥下宗

門祖日隆聖人が説かれた十二宗名の十一番目は「教弥実位弥下宗」です。

最高の功德が包まれる妙法だからこそ、罪障の深い凡夫も含めた一切の衆生が救済できます。人を選ばずお教化の手を差し伸べ、現証の御利益がいただけるよう導けるのは、そんな妙法の功德を身に付けた佛立菩薩のみです。この宗名は、ほんもののご信心だけが為し得る真実の衆生救済は、上行所伝の妙法の口唱信行だけにあることを教えています。

○「教弥実位弥下」は中国の妙楽大師の著作にある「正しく権実を判ず。教、弥々実なれば、位、弥々下る。教、弥々権なれば、位、弥々高し」という言葉が出典です。意味は、「仏の教えの権(仮の教え)と実(真実の教え)を判定する。教えが真実になるほど信心未熟な人をも救い、功德の浅い仮の教えほど、能力の高い人しか救えない」というものです。この道理は、よく薬に譬えて説明されます。即ち、軽い病気なら市販の簡単な薬でも治せますが、重い病になると最先端の最高のお薬が必要になります。つまり、救われる対象を見れば、その教えの功德の深さが分かると、妙楽大師は教えられたのです。

○お祖師さまは『四信五品抄』に、「法華経以前に説かれた教えより、法華経はより多くの人を救済し、法華経も迹門の教えより本門の教えが一切の衆生を救い尽くす」と述べられて、続いて「教弥実位弥下の六字に心を留めて案ずべし」と仰せです。法華経以前の教えでは、修行の満ちた高位の菩薩だけに許された成仏が、法華経迹門では釈尊ご在世の修行者全体に広がり、更に本門では末法の「名字即」までもが救済の対象となります。妙楽大師の教弥実位弥下の御法門に照らせば、教えの優劣は歴然です。

○そこで初めて仏法に出値った罪障の深い「末法の凡夫」が御利益を得るには、必然的に最高の功德が包まれた久遠の妙法が必要になります。久遠本仏(根本の仏)が上行菩薩に妙法を託し、末法の人々の苦悩を救わんとされた所以です。ところで、そんな教弥実位弥下の妙法を唱えるお互いは、妙法の功德を我が身に得た証として、ご奉公の姿勢の中にも教弥実位弥下の精神が現れてこなければなりません。

○ご信心のよく出来るご信者ばかりと付き合い、手のかかる人を遠ざけるようなご奉公では、教弥実位弥下の妙法をいただく佛立信心にはなりません。お教化の相手を選び、面倒な人にはご信心を勧めないのもご信心の筋が違います。素直にご信心が出来ず、罪障ばかりを重ねる人こそ、み仏が上行所伝の妙法を顕して救おうとされた衆生です。その御意をいただき、最もご信心から遠く離れた人、大きな問題を抱えるたいへんな人こそ「御題目で救われねばならない」とご奉公できるのが佛立菩薩なのです。

○開導聖人ご晩年のご教導の柱の一つが、この教弥実位弥下でした。御指南書の中には「まだ難しい」と教えを噛み砕き、未来の私たちのためにやさしく説き直されたご苦心の跡が散見できます。そんなご信心を継ぐ佛立信者は、新しいご信者や宗外の人たちにも御題目のご信心が伝えられるよう、精一杯の工夫に努めなければなりません。

〔開導聖人御指南〕

教弥実位弥下は、大人が小児につきおうていて、小児の如くなるにはあらず。つき合おうていて小児を教うるなり。(十三卷一四〇頁)

〔開導聖人御教歌〕

中々にあゆまれぬ子はせなにおひ つれてゆくこそおや心なれ

File.36 十二宗名⑫ 直入法華折伏宗

門祖日隆聖人が説かれた十二宗名の最後は「直入法華折伏宗」です。

法華経本門のご信心を学ぶご信者は、相手の人が直ちに妙法の口唱に励み、すみやかに現証の御利益がいただけるよう、意を尽くして折伏が出来る人に育ちます。これはそのまま、法華経の不軽品に示された本因妙の菩薩です。この宗名は、そんな不軽流の「真の日蓮が弟子旦那」を生み出すのが、私たちの佛立信心であることを教えています。

○ 仏典には段階を追って少しづつ説かれた教えと、結論のみを教えたものがあります。前者は法華経以前に説かれた方便経で、後者が法華経本門の教えです。段階を追って説かれたのは、相手が自発的に自己を高めるためで、これは相手にも相応の能力が必要です。一方、結論だけを示して他を許さないのは、自発性を求めても道を誤る確立が高い人々のためです。仏教はすべて法華経本門の「信」を目指しながら、釈尊ご在世の人々には相手の自主性を尊重して徐々に法が示され、末法の罪障深い凡夫には上行菩薩に託して妙法のみを伝えました。故に上行所伝の御題目のご信心を「直入法華」と言います。

○ なぜ末法のお互いは自主性が認められないのかというと、過去に妙法の下種がなく、ご信心の芽がないために煩惱が盛んだからです。ご信心を根としない知恵は、いわゆる邪智邪見で、功德を遠ざけ罪障に馴染みます。真理の法をも曲解して、自分を利する理屈を作ってしまうのが末法の凡夫の知恵なのです。ベテランのご信者でも御法門聴聞を嫌う人は、ご奉公が出来ない理由を並べて御利益がいただけなくなるのがその証拠です。○ そこで末法の凡夫にご信心を得させるには、方便を用いず直ちに妙法を示し、相手の我を破って口唱信行をさせねばなりません。これが「折伏」です。ところで折伏というと、荒々しく相手を糺し、高圧的に従わせることと思われがちですが、お祖師さまが「手本とせよ」と仰せの法華経不軽品の折伏行は決してそうではありません。相手がやがて口唱行の功德で仏となることを信じ、故に合掌礼拝の姿で敬いを忘れず、怨嫉を受けてもひるまずご信心を勧め、決して怒りの心を起こさない……。法華経本門には、そんな愚直なまでの折伏行が示されます。これを実践するのが不軽流の佛立信心です。

○ ですから私たちは折伏をするに当たって、慈悲の心で丁寧に、やさしく、分かりやすく諭すことが大切と教わります。開導聖人は「腹立てさせるは仕損じ」と仰せで、いくら正しいことを筋を通して話しても、怒りも露わに言葉を荒げ、「聞かない方が悪い」といった独善的な態度では、相手にご信心を教えるための折伏にはなりません。「ご信心をやめられると困る」と心配し、相手におもねる必要はありませんが、自身のご信心や相手への思いを伝える最善の努力を放棄して、法華経本門の菩薩行は完成しないのです。○ 経力に縋り、現証を見せ、範を示してご信心の有難さを根気良く伝え、敬いの姿を崩さない……。そんな不軽流の折伏で、御題目の口唱行を弘める宗旨が本門佛立宗です。

〔開導聖人御指南〕

折伏は慈悲の最極なり。御利生の門を開く鍵は折伏なり。(十三卷二二九頁)

〔開導聖人御教歌〕

義は強くことやほらかに身を下る これぞ不軽の折伏としれ